
ポケモン不思議のダンジョン 一筋のナガレボシ

曾我氏 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 一筋のナガレボシ

【Nコード】

N6854V

【作者名】

曾我氏2

【あらすじ】

記憶を失いなぜかヒトカゲになってしまった少年レグルスと見習い探検隊ルメリク。ひよんな事から出会ってしまった2匹は、とても奇妙で不思議な大冒険を繰り広げる事となる。やがて彼らは、世界を巻き込んだ戦いに足を踏み入れていく事となる。

その裏に隠された戦いがあることを、いつか彼らは知る事になるだろう。きつと・・・。

さいしよがき

注意 この小説は「ポケモン不思議のダンジョン 空の探検隊」をベースにした、オリジナル小説です。

そういった物が苦手なお方は、回れ右した方が良いかもしれません。

また、つまらないならつまらないで、何処がつまらないか教えてください。改善できるよう頑張ります。

ただつまらないだけと言った声は基本的に無視します。あしからず。

また、キャラがたまに崩壊する事がありますし（おもに伝説ポケモン）シナリオ上キャラがひどい目に会う事もあります。

そこだけは知って置いて下さい。なお、そこに関する苦情は受け付けません。（シナリオ上どうしようもないため）

感想はいただけるととっても嬉しいです。踊るぐらいです。はい。励みにもなりますので、ばしばしどうぞ。

最後に、第一章の出来が非常に悪いです。

例としては、括弧かっこの前に名前が付いてたり、情景描写がダメダメだったり。（今もダメダメだけど）

これに関しては、第二章の区切りが付き次第直すので、ヨロシクお願いします。

コラボに付いてですが、個人的に大歓迎です。ただし、あくまでコラボですから、多少はOKですが（むしろ歓迎）キャラを壊しまくるのはやめてください。希望の方は感想でどうぞ。いや、むしろお願いします！

お気に入りしてくれると喜んじゃうぞ

プロローグ

プロローグ

やあ、そんな困った顔してどうしたんだい。え？ここが何処かわからないって？

・・・そうだね。ここは何処でもあるし、何処でもないんだ。意味が分からないって？

そうだね。ま、君が順調に進んでいれば分かる事さ。今はまだ知らなくて良いよ。うん。

そんな悲しそうな顔しないで。大丈夫だよ。絶対にボクが導いてあげるから。

ふふっ。君は本当に面白い子だね。いまさら初めましてだなんて。ボクと君はもう、3863回も出会った事あるのに。

・・・あ。そろそろ時間みたいだね。大丈夫だよ。絶対にボクが導いてあげる。

じゃあ、向こうの世界で会おうまで、しばらくお別れだね。

はいはい。

プロローグ（後書き）

プロローグちょっと変更。

・・・いや、だいぶ変わったな。

キャラ紹介（前書き）

適当に更新して行くので、たまには見てやってください。

ちなみに上から

名前

種族

性別

年齢

立ち位置

性格

所属

一人称

説明

大体はこの流れで行きます。
それではどうぞ！

キャラ紹介

キャラクター紹介

名前 レゲルス
種族 ヒトカゲ
性別 女っぽい男（主に顔）
年齢 12歳前後
立ち位置 主人公
ギャグパート ツツコミ
性格 きれもの くろうにん おだやか
所属 チームナガレボシのリーダー

説明

この世界での主人公であり、チームナガレボシのリーダー（仮）である。なぜか記憶を失っているらしく、記憶を取り戻すまでギルドにやつかいになる予定。とても穏やかな性格をしているが、仲間を傷つけられた時には結構怖い。どちらかと言うとネガティブに考える傾向があり、良く言えば慎重、悪く言うなら臆病である。ちなみに、さりげなく腹黒い事を言ったり、行動に移したりしている。

名前 ルメリク
種族 ゼニガメ
性別 男
年齢 13歳
立ち位置 パートナー

ギャグパート ボケ

性格 すなお むじゃき

所属 チームナガレボシ副リーダー

説明

この世界でのパートナーであり、レグルスを探検隊に誘った張本人である。その年頃の少年とは思えないほど落ち着いており、探検でも皆を引っ張っていきらしい。リーダーシップも中々あり、みんなのお兄さんと化している。何処にでもいる普通の少年だったが、ある日の夢を境に・・・。

名前 フェイン

種族 ピカチュウ

性別 男

年齢 外見年齢10歳程度。本当の年は不明。

立ち位置 不明

ギャグパート ボケ イジられ

性格 マイペース れいせい

所属 チームナガレボシ参謀？

説明

とにかくマイペースで明るく、常に笑顔を絶やさないムードメーカー。普通のピカチュウよりも一回り小さいため舐められがちだが、実はナガレボシの中で一番強い。その中でも戦況を読む事に長けていて、作戦を考えるのは大体が彼。不思議な力を持っているらしいが、本当の事は不明。いつも笑顔で塗り固めている裏に、何か別の感情が隠されているらしい・・・。

名前 ポラリス
種族 ロコン
性別 女
年齢 13歳
立ち位置 ヒロイン
性格 ひかえめ ゆうかん
所属 チームナガレボシ

説明

真正正銘のヒロイン。ギルドの中でもかなりまともな性格の持ち主で、ギルドの癒しとなっている。戦闘はあまり得意ではないが、見た目では予想できないほど勇敢な性格をしている。探検隊に入りたくて入ったわけではなく、母が病気のため、入院費を稼ぐために入隊したらしい。将来はカウンセラーになるのが夢らしく、夜中必死に勉強している姿を見る事が出来る。

ギルドの先輩たち

名前 シヤム
種族 ザングース
性別 男
年齢 19歳
立ち位置 先輩
ギャグパート ツッコミ
性格 苦勞人 まじめ オカン

所属 シリウスのギルド所属

説明

明らかに人相で損をしている人ランキング第一位。
その性質上、色々な人にイジられることが多い。とても面倒見が良く、通称ギルドのオカンと呼ばれている。昔は結構いじめられっ子だったらしく、強くなるために探検隊に入っただけらしい。シリウスに気を寄せている事は、もはや一般常識となりつつある。

名前 ワズン

種族 ワタツコ

性別 男

年齢 自称24歳。

立ち位置 ギルドの先輩

ギャグパート 周りの状況しだい

性格 きまぐれ

所属 シリウスのギルド所属

説明

自称さすらいの風来坊らしいが、何処かへさすらう様子は全く無さそうなお方。一見何も考えていなさそうで意外と悩み事は多いらしい。ギルド長として幼いシリウスを懸命にバックアップするのが日課らしく、シリウスの無茶振りを少しだけ楽しんでいる。基本的にデスクワーク担当で、探検隊としてはぶっちゃけかなり弱い。

名前 シリウス

種族 バシャーモ

性別 女
年齢 19歳（自称）
立ち位置 ギルド長
ギャグパート ツッコミ
性格 れいせい おっとり 物好き
所属 不明

説明

ナガレボシが所属しているギルドの長。^{リーダー}

ふだんはおっとりとした女の子だが、大事な場面では急に冷静になる。あまりの変化にこちらが付いて行けないほどである。昔探検隊をやっていたが、あるときパートナーが失踪したらしく、昔の事は語りたがらない。

大酒飲み。あくまでも「自称」19歳なため、未成年ではない。

何か大切な事を隠しているようだが…。

名前 エルナト
種族 デンリユウ
性別 女
年齢 24歳
立ち位置 ギルドの研究員
ギャグパート カオス担当
性格 研究バカ 楽天家
所属 シリウスのギルド所属

説明

通称ギルドの色気担当。本当に通称である。普通のデンリユウと違い、毛並みがピンク色の色違い。

見た目とは裏腹にかなり賢いらしく、発明品でいくつか賞をもらっ

ている。穴抜けの玉も彼女の作品らしい。

過去になんか色々あったらしいが、今は忘れたとの事。本当かどうかは定かではない。

解剖大好きっ子で、何人か解剖したとかしないとか。

名前 エリアス

種族 ルカリオ

性別 男

年齢 不明

立ち位置 傍観者

ギャグパート なし？

性格 冷静 静か まじめ

所属 不明

説明

ルメリク曰く「べらぼうに無口」な先輩。いつも静かに佇んでいて、なにかんがえてるか分からない。

戦闘に関しては冷静で、的確に敵をやつつける。時折さびしそうな目をするのは気のせいではないだろう。

実はフェインと仲がいい。

町の人々

名前 ルハウト

種族 ブイゼル

性別 男

年齢 26歳（自称）

立ち位置 探偵

性格 変人 きれもの

所属 アクアリウム私立探偵事務所

一人称 自分

説明

この人を一言で表すとすれば、変な人。語尾に♪をつけている台詞は大体この人の台詞。

謎の発光事件を追ってこの地へとたどり着いた。らしい。アクアリウム探偵事務所とは、私立探偵のなかでもエリートに属するらしく、水タイプのポケモンしか入れないそうだ。警察や保安官にも若干のコネを持っているらしく、情報をよく提供してくれたり、面白い話をしてくれたりする。

名前 カストル

種族 プラスル

性別 少年

年齢 8歳

立ち位置 町の少年

ギャグパート なし

性格 がんばりや

所属 なし

説明

町の少年で、ポルックスの弟。

不思議な兄を持つせい、8歳にしては大人びている。

名前 ポルックス

種族 マイナン
性別 少年
年齢 9歳
立ち位置 町の少年
ギャグパート なし
性格 ふしぎ おっとり
所属 なし

説明

町の少年で、カストルの兄。
やたらと不思議なオーラを出す、普通の子供。

第一探検 未知との遭遇！？

彼が目を覚ましたのは夕方の事だった。

夕方といってもほとんど夜に近い時間帯だったが。

「う・・うーん・・こゝここは一体・・・」

一人つぶやく。

「いつつ・・・なんでこんな所にいるんだよ・・・」

そう言いつつ立ち上がり、辺りを見回す。

「向こうに明かりが見える・・・行ってみよう・・・」

フラフラした足取りで明かりの見える方向に行こうとした途端

ガサッ

茂みが揺れる音がした。

ガサガサッ

揺れる音がだんだん近づいてくる。少なくとも小動物が立てる音ではないのは確かだ。

(何だこの音・・・こっちに近づいてきてる・・・いつそこっちら・・・)

「そこにいるのは誰だ!!」

いちかばちかの賭けだった。もし野生の動物とかだったら美味しくいただかれておしまいだろう。

だがもし人だったら、事情も聞けるし何より安心できる。

「うゝん。誰って言われても、僕ですとしか言えないし・・・」

困ったような口調で話される。よかった。どうやら人だったみたいだ。

「んゝと。そこに居るのは誰かな？今行くから。」

よいしょっと、と言う声とともに僕の前に姿を現した・・・亀？

いや、そのはずは無い。そもそも亀は二足歩行できないし。それに・・・人の言葉を話さない。

はずだよね。でも違った。だって・・・

「君、この辺で見ないヒトカゲだよね？何処から来たの？」

思いつきり喋ってるんだもん！

・・・

（えーと。なんか・・・あれ？）

困る。超困る。めちゃくちゃ困る。だって、気がついたら変な所にいるし。亀は喋るし。あとなんかヒトカゲとか呼ばれてるし。

「ねえ。どうしたの？急に考え込んだりして。」

亀が僕の顔を覗き込む。

「ね、ねえ。ヒトカゲって・・・僕のこと？」

あまり聞きたくなかった。もしこれで、そうだよ。とか言われたら、どうすればいいか分かんなくなる。

「そうだよ。君の事以外に、誰が居るってのさ？」

最悪の答えいただきました。ご馳走様です。

「・・・変なの？鏡でも見せてあげようか？」

うわ。またもや最悪の選択肢。でも、これで断っても良い事はないだろう。

「あ、うん。貸してくれるかな？」

そつと鏡を覗き込む。そこには真っ赤な顔をした僕(?)が映し出された。

^{フリーズ}凍結という言葉が一番良く似合う男選手権がもしあったら、おそらくぶっちぎりの優勝だろう。

そんな顔をしています。はい。

・・・

あれ・・・何時の間に寝ちゃってたんだろう？あれは夢だったのだろうか。

と、考える僕を思いっきり現実に戻す声。

「もう大丈夫？気を失ってたけども。」

「うん・・・」

どうせなら夢でよかった。

「何があつたの一体？」

「実は・・・」

僕はこれまでの経緯を伝えた。

ところどころ首を傾げられたが、黙って話を続ける。

「記憶喪失ねえ・・・」

やっぱりそんな物を見る目でこちらを見つめる。

「信じてない？」

「もちろん。いきなり記憶喪失って言われてもねえ。」

困った様な目でこちらを見る。

「そつだ！君の名前は？記憶が無くても名前ぐらいは覚えてるでしょ？」

うーん・・・名前・・・思い出せない。

「僕の名前はね・・・」

しびれを切らしたのだろうか。亀が口を開く。

「ルメリクって言うんだ。あ、種族はゼニガメ。」

！？

その名前を聞いた瞬間、何故か頭の中で名前がよぎる。

「レ・・ゲルス・・」

「レゲルスって言うんだ。変な名前。」

くすりと微笑みながら言われる。何か無性に腹立つ。

「そういえばさ、これからいく所あるの？行く所無いなら来て欲しいんだけど。」

「来て欲しい所？」

「うんうん。付いて来て。」

ついて行くことにした。

「何処行くの？明かりとは逆方向だけど。」

「んー。着いてからの楽しみってことで。」

草むらを抜けると崖が広がっていた。

「上を見てごらん。」

言われたとおりにして見ると、上には満天の星空が広がっていた。

「すごい・・・」

「綺麗だよな。冬ぐらいになると流星群が見えてもっと綺麗なんだよ。あ、そういえばさ、行く所無いんだったよね？」

うなずく。

「よし！じゃあついて来て、今からギルドに行くから。」

「ぎるど？なにそれ・・・」

「えーっとギルドって言うのはね・・・いいからついて来て。そして分かるから。」

答えになってないよルメリク君。

しかしまあ、何でこんな所に居るのだろうか？謎は深まるばかりだ。

第一探検 未知との遭遇！？（後書き）

手直ししました。前の奴が見てられないほどひどかったです。
泣）

第二探検 探検隊ナガレボシ

「大丈夫じゃねーよ全く・・・夜だって何回も起こされたんだぞ！」

レグルスと呼ばれるヒトカゲは愚痴を漏らした。

「死ななかつたんだし良いじゃないか別に」

負けじと対抗するゼニガメのルメリク。

どうやら、彼の寝相は殺人的らしい。

「ここ見てよほら。」

あざができている。

「んー。ゴメンゴメン。」

ケラケラ笑いながら謝るルメリク。

これ以上言っても無駄だと分かっていたため、ここで話を切る。

「ったく。じゃあ行くか。」

「ああ。そうだね。」

正式にギルドの一員になるためには、こここの親方から許可をもらわ

ないとダメだとか。

二人は部屋からでて歩き出した。

「朝帰りか・・・いいなあ・・・」

何かを勘違いしているらしいワタッコのワズン。

「まあ見つからないようにな・・・」

未練たつぷりなご様子だ。

僕は男だっつーの。

そんなこんなの中に扉の前にたどり着く。

コンコン

ノックの音が室内に響く。

鍵がかかっているため、おそらく中に誰がいるだろう。

「入っていーわよー」

ダルそうな声が聞こえる。

知らない間に鍵が開いている。

「はいりますよー。」

ずかずかと入り込んでいくルメリク。

親方にそんな態度ってどうなの？

あらあら、ついに恋人が出来たのね。おめでと。」

で、その娘はなに、探検隊志望かしら？」

「僕は男です。」

「えっ。」

苦笑いを浮かべながら近づいてくる。

ルメリク君の紹介かしら？」

そんな所です。

拉致られた気もするけどね・・・

「あの、ところであなたは一体・・・」

「自己紹介がまだだったわね。私はシリウスって言うの。よろしくね。」

バシャーモだろうか？

僕らより一回り大きい。

「探検隊を結成するためにはチーム名が必要になるわ。どうするの？」

名前か・・・

「考えてなかった・・・」

「星の名前とか良さそうだね。」

「流れ星とか。」

レグルスが口を開く。

「ナガレボシ・・・いい名前ね。そうしましょう。」

勝手に決められた気がする・・・。

まあ、他に案も無かったし、大きくうなずく。
ルメリクも満足気だ。

どこからか聞き覚えのあるファンファーレが聞こえる。

なんなんだこの合図。

「よし、探検隊ナガレボシ結成よ！」

ルメリクが喜んでいるからか、つられて喜ぶ。

なんとなく嬉しくなってくる。

この瞬間に、後代まで名前を歴史に残す探検隊が結成されたなんて、きつと誰も知らないだろう。

.

「さて、まずは準備をしましょう。ルメリク君。」

「はいっ！」

「元気でよろしい。彼に色々教えてあげて。」

「わかりました。」

手招きをされる。

ついて来いと言う事なのだろう。

町・・・と言えるのだろうか。

どちらかと言うと村と言ったほうが正解なような気がする。

「ここが町って奴？」

黙って看板を指差される。

「ルメリクさーん」
「さーん」

ルメリク「お、久しぶり。カストルとポルックスだったっけ？」

「そうです。」
「ですっ。」

プラスルとマイナンというポケモンらしい。

「ボクたちこれからエレキジェム探しにいくんだ！」
「だー！」

見るからに子供に見えるが大丈夫なのだろうか？
ルメリク「危なくないのかい？」

「大人といっしょに行くから大丈夫だよー。」

しっかり話す事も出来るようだ。

「大人って一体誰の事さ？」

「大人って言うのはね・・・」

「おーいこっちこっち！」

ひい、ふう、と情けない声を上げて走ってくるフリーディン。

「いやはや、元気な子供には追いつけませんで・・・」

「カーフさんおそいですよう。」

「おそーいおそーい。」

「ごめんごめん。支度してたら遅くなっちゃって・・・」

「って、あなたたちは？」

「僕はルメリク、こっちはレグルス、僕たち探検隊なんだ。」

軽く会釈する。

「これはこれは、探検がんばってくださいね。」

「ああ、どうも。」

「じゃーねー！」

「いつてらっしゃい。」

笑顔で送り出す。子供は無邪気で少し憧れる。

「さ、僕たちも行こうか。」

「分かった。」

町へ歩き出す二人を後ろから見つめる影。

？

視線を感じた。

・
・
・

辺りを見回しても姿は見つからない。

「何してるのぉ～早く早く～」

ルメリクの呼ぶ声に向かって走り出す。

第二探検 探検隊ナガレボシ（後書き）

ルメリク「・・・え？ここで終わり？」

そうだよ。何か文句でも？

ルメリク「何か尻切れトンボのような感じがするんだけど。」

作者の精神状態から判断しても、この辺できつといたほうがいいの
！！

ルメリク「ふーん」

はい、後は？

レグルス「カストルの辺りから僕が空気と化している気がします。」
わざとです。

レグルスはそういう役なんですよ。きっと。

レグルス「僕主人公だよね・・・。」

次回は初戦闘のようなものですよん。

第三探検 誘拐事件発生！

ルメリク「んで、あっちが道場、んでもってあっちがお店。」

レグルス「ほうほう。」

二匹のポケモンたちが話しながら歩いて行く。

ヒトカゲの名前はレグルスと言う。

記憶喪失で何も思い出せないとか。

ルメリク「まずはショップへ行こうか。」

ゼニガメの名前はルメリクと言う。

見習いの探検隊で、レグルスを無理やり勧誘したらしい。

熱心に話すゼニガメと、目を輝かせて聞いているヒトカゲ。
とても微笑ましい光景である。

ミギー「おお、ルメリクさんですか。」

ヒダリー「お久しぶりですねー。」

ルメリク「ああ、はい、ご無沙汰しています。」

ミギー「それはそうと今日は何の用事ですかい？」

ヒダリー「もしかして買い物？そうなんだね。」

まだ何も言っていない気がします。

ミギー「んで、君は誰かな？」

レグルス「レグルスって言います。」

丁寧口調で返す。

第一印象は大事だもんね。

ヒダリー「はいはい、よろしくね。んで、今日は何を買いに来たの？」

ルメリク「適当に繕ってくれる？これくらいで。」

そう言ってお金を突き出す。この世界のお金の単価はポケで、見た目はお金と変わらないが、Pと彫ってある。

ミギー「分かった。そういえば最近誘拐犯が増えてきたんだってね？」

ルメリク「ええ、まあ。子供を付け狙う輩が増えているって話でしたよ。」

ヒダリー「その誘拐犯の名前が分かったんですよ。確かカーフとか言っていましたね。」

ルメリク「まさかとは思うけど・・・フーディン？」

ヒダリー「何だ、知ってたんですか。知ってるなら早く・・・ってあれ？」

店の前から二人の姿が消えている。遠くの方で走っているのが見え

た。

ミギー「お金返してないのに・・・」

・
・
・

カストル「いなくなっちゃった・・・」

ルメリク「おいカストル！ポルックスは？」

カストル「そうなんですよう。目を離れた隙に居なくなっちゃって・
・
」

レグルス「何処で居なくなったか分かる？」

カストル「はい。やまびこの丘に行っていた時に居なくなりました。
カーフさんも居なくなっちゃって・・・」

レグルス「分かった。ありがとう。君は今すぐ大人に伝えて。」

カストル「わかりました。あそこは不思議のダンジョンなんで、気を付けてください。」

レグルス「ルメリクっ！今すぐ行くよ！」

レグルス「分かってる。やまびこの丘はここからすぐ東にある。付いて来て。」

・
・
・

レグルス「ねえルメリク、さっき言ってた不思議のダンジョンって何？」

ルメリク「最近発見されたダンジョンの総称で、一度入ると出口か道具を使う事でしか出られないダンジョンの事。」

レグルス「もし倒れたらどうなるの？」

ルメリク「そのまま死ぬのを待つしかないね。そうならないようにこれがある。」

と言ってバッチを取り出す。

レグルス「探検隊バッチがなんの役に立つの？」

ルメリク「これがあると、倒れてしまった時にも自動的に戻されるようになっているんだ。だから安心して探検活動を行える。」

レグルス「ふーん。」

ルメリク「あと、不思議のダンジョンは入ることに構造が違っているんだ。だから毎回違った発見がある。」

レグルス「探検するにはもってこいの場所なんだね。」

ルメリク「そうなんだ。でも、普通の場所と区別がつかないから迷い込むポケモンも多くてね。だから救助の依頼が多いんだ。」

レグルス「んでさ、さっきからこちらを見ているあれはなに？」

ルメリク「ん？ああ、あれが敵だよ。もうすぐ襲ってくるよ。」

一匹のポケモンがこちらを睨んでいる。いや、一匹だけじゃない。

グガア！

こちらに飛び掛ってくる一匹のポチエナ。

レグルス「おわっ！」

間一髪の所でかわす。危ない所だった。

レグルス「これどうすればいいのっ!？」

ルメリク「殴るなり炎吐くなり好きにしなよ。好きなだけあばれていいからさ。」

レグルス「んなこと言われても・・・っか炎って何？」

ルメリク「口からボワツと。」

アバウトすぎだろうさすがに。もう少しまじめな答えは無いのだろうか？

キシヤア！

ふたたび飛び掛ってくる。

仕方ないので殴る事にした。炎はよく分かんないし。

ゴツと言う鈍い音を立てて、左ストレートが綺麗に決まる。

意外と軽かったようで、3メートルほど先まで綺麗な線を描いて吹っ飛んでいく。

ルメリク「おめでとうさん！第二波が来るよ。」

いや、あんたも戦ってください。お願いだから。

一気に三体も飛び出してくる。一体では倒せないと判断したのだろう。

ルメリク「少し数が多いね。僕も手伝うよ。」

これで2対3になった。

ルメリク「よし、真ん中のあいつは任せるから、後の2体はまかせて。」

レグルス「わかった。」

さらっと強い方を任された気もするが、とにかくこの一体に集中する事に決めた。

ルメリク「オラア！こっち来いよザコども！」

二匹のポチエナがルメリクの方に向かうのを確認すると、戦闘の態勢に入る。

グラエナは今にも飛び掛ってきそうだ。この一帯を牛耳っているボスなのだろう。

相手の様子を見る事にした。どんな攻撃を持ってるか知りたい。

ガアアッ！！

レグルス「早いつ！」

よけきれずに腕を噛まれる。すぐに振りほどいたが噛まれた所からは血が出ている。

レグルス（避けられない以上は攻めるしかないっ！！）

グラエナは軽く避けると、再び噛み付いた。的確に急所を狙っている。

レグルス「があうっ！！」

あまりの痛さに思わず声が漏れる。出血が激しく、今のままでは命も危ないのが目に見える。

レグルス「まずい・・・このままじゃ・・・」

再び飛び掛ってくるグラエナ！

レグルス「いちかばちかだっ！！」

ボワツと音を立てて飛び散るひのこは、グラエナにとって予想外だったらしくクリーンヒットした。

それはひのこ言うよりはかえんほうしゃに近い物だった。

グラエナがこんがりとローストされている。

完璧に気絶している。もうしばらくは目を覚まさないだろう。

ルメリク「レグルスッ！大丈夫か！？」

レグルス「なんとかね・・・」

血がだらだらと地面に流れている。どう見ても大丈夫ではない。

ルメリク「これ食べてみて。」

ルメリクが差し出したのはみかんに近い果物だった。少し青っぽい色をしている。

レグルス「なんか毒々しいね・・・これ。」

レグルスに無理やり押し込む。少し顔をしかめたがすぐに飲み込まれる。

レグルス「丸飲みは・・・だめ・・・」

ゲホゲホと咳き込むレグルス。さっきまで血を流していた場所は、綺麗さっぱり無くなっていた。

ルメリク「すごいでしょ？」

レグルス「すごいけれども・・・まずい・・・」

ルメリク「良薬は口に苦しって言うでしょ？」

レグルス「いや・・・まあ・・・」

無理やりに納得させられてしまった。

・・・

レグルス「大分先まで進んできたね。今何階ぐらいかなあ？」

ルメリク「しっ！今声がした。」

耳をすませてみると確かに声がする。ポルツクスの声だ！

レグルス「あっちのほうから声がしたよ。」

ルメリク「分かってる。行こう。」

レグルス「それにしてもさあ、ルメリクって、性格変わるよね。」

ルメリクが首を傾げる。

レグルス「いや、だからさ、オラァ！とか言うキャラじゃないと思
ってた。ずっと。」

ルメリク「いや・・・あれは・・・その・・・」

ポルツクス「助けてえ！」

「「!」」

レグルス「今のって・・・」

ルメリク「うん。多分。」

ルメリク「あっちから聞こえた。」

どんだん声が近くなっている。この先に居るのだろうか。

第四探検 フラッシュバック

悲鳴が聞こえた所からどれくらい走っただろうか。

急に視界が開ける。どうやらもうすぐ頂上に着くみたいだ。

急に足を止めるルメリクに思いっきりぶつかってしまう。

レグルス「急に止まらないでよ・・・」

鼻をさすりながら文句を垂れる。

ルメリク「ごめん。あれなんだと思う？」

ルメリクが指差す先には謎の球体が浮かんでいる。

レグルス「なに・・・あれ・・・」

どこかで見たような気がする。でも、それが何処で見た物か思いだせない。

ルメリク「どうするよ？」

レグルス「どうするって言われても・・・」

ルメリク「触ってみるね。」

てくてこと近づいていくルメリク。その姿にどこか違和感を抱く。

レグルス（何だろう？この光景どこかで・・・）

キイイン

頭の中にいやな音が響く。

「!」

フラッシュバックと言っのだろうか。頭の中に映像が浮かび上がってくる。

レグルス（これは・・・なんだ・・・）

今と似たような光景が見える。前にどこかで見たような気がしてならない。

レグルス（爆発・・・？）

レグルスの映像の中には、球体に触った瞬間に吹っ飛ばされる二匹の姿が見えていた。

レグルス（今のがもし本当だとしたら・・・）

「!」

レグルス「ルメリクッ！それに触ったらだめだ！」

ルメリク「何で？もう触っちゃっ」

思いつきりルメリクを引つ張る。その瞬間、例の球体が爆発する。

よく漫画とかで見る、あんな形の爆発だと思っただけければ良い。

ルメリク「けほっ．．けほっ．．た、助かったよ．．」

レグルス「どういたしまして．．けほっ．．」

ルメリク「さ．．先に進もう．．」

地面がえぐれている。予想以上に威力が高かったようだ。

ルメリク「あの爆発をもろに食らってたら．．．」

レグルス「考えたくもない．．」

とってもグロテスクな事になってたんだろうな。多分。

．．．

この階段を上げれば頂上らしい。ここまで一本道だったから、この先に居るのは間違いないだろう。

ルメリク「じゃあ・・・行くよ。」

レグルス「あ・・・待つて。作戦立てようよ。」

ルメリク「いいけど・・・何か案があるの?」

レグルス「まあね。えつとまず・・・」

・・・

カーフ「何度言わせる気かな?ここには誰も来ないんだよ。」

ポルックス「冗談・・・だよね?」

カーフ「言う事聞いてくれたら帰してあげるからさあ・・・」

ポルックス「何・・・一体・・・」

カーフ「後ろに小さな穴があるだろう。その中からお宝を取って来てほしいんだ。」

ポルックス「やったら帰らせてくれますか？」

カーフ「もちろんだよ。さあ、早く。」

ポルックス「と・・取れない・・。」

カーフ「取れないなら良いんだ。こっちに来てくれ。」

ポルックス「ごめんなさい・・・。」

カーフ「いいんだ。ただし・・死んでもらうがな。」

ポルックス（殺される！！）

カーフ「安心しろ。骨だけは家に送ってやるから。」

ポルックス「助けてっ！誰か！」

ルメリク「そこまでだッ！」

カーフ「誰かと思えば。爆弾はどうでしたか？」

ルメリク「あれはお前が仕掛けたのか。」

カーフ「ええ、そうですよ。所であなと一緒に居たヒトカゲはどこへ？」

ルメリク「あいつは・・・死んださ。お前のせいだな。」

カーフ「どうやら引つかかってしまったようですね。あんな初步的なトラップに。」

ルメリク「誘拐犯として、お前を逮捕するッ！」

カーフ「残念だったな。こちらには人質が居る。手出しはできまい。」

レグルス「一体何処に人質が居るのかな？」

カーフ「チツ。貴様、何時の間に救出した？」

レグルス「あんたらが勝手に僕を殺していた時さ。ね、ルメリク。」

ルメリク「こうでもしないと警戒されるかなって・・・ね。」

レグルス「ちなみにポルックスは帰しておいた。あんたの言う人質がその子だったら、残念でした。」

カーフ「貴様らッ!!」

レグルス「うおっ、と。」

間一髪で避ける。

バキッと音を立てて木が折れる。まともに攻撃を食らったら骨の2、3本は碎けるだろう。

ルメリク「遠距離から攻めるよ。」

レグルス「了解!」

それぞれみずでっばう、ひのこで応戦する。

カーフ「甘いッ!ねんりき!!。」

攻撃がはじき飛ばされる。ぜんぜん利いていない。

レグルス「だったら近くで!」

レグルスは足で蹴ろうとしたが、

カーフ「ねんりき!」

受け止められ、そのまま上空へと打ち上げられる。

急に止まったかと思うと、そのまま地面にまっさかさま。

レグルス（まずい。このままだと!!）

ルメリク「みずでっぽう！」

水に受け止められる。

ルメリク「大丈夫か!？」

レグルス「なんとか。それよりもどうする?」

ルメリク「石投げたら当たったよ。」

何故石を投げたか知らないがとりあえずの突破口は見えた。

レグルス「多分あいつは、早すぎるものが受け止められないんだ。」

ルメリク「石とか?」

レグルス「そう。つまり・・・」

ルメリク「OK。分かったよ。」

こんどもまた蹴ろうとする。

カーフ「馬鹿め。さっきの事を忘れたのか!ねんり」

レグルス「食らえっ!」

カーフに渾身の蹴りを繰り出す。

見事にヒット。

カーフ「貴様・・・ぐうッ！」

続けざまにもう一発。

ルメリク「止めたっ！」

ルメリクは何か種のような物を投げつける。

ドカン！

カーフは爆発とともに吹き飛ばされる。

気絶しているらしい。もう動かないみたいだ。

ルメリク「しかし、レグルスって賢いよね。あんな作戦思いつくなんてさ。」

レグルス「水の力で押し出せば早くなると思って。」

ルメリク「でもさ、危険だよそれ。尻尾の炎見てごらんよ。」

尻尾の炎は少し勢いが落ちていた。

ルメリク「ヒトカゲってさ、尻尾の炎が消えると死ぬらしいよ。」

レグルス「この作戦は廃止にしよう。」

ルメリク「賢明な判断だね。それが良いと思うよ。」

・・・

レグルス「さて。こいつどうする？」

ルメリク「もうすぐライチュウ保安官が来るから、来たら引き渡して帰ろう。」

ルメリク「一つ聞きたい事があるんだけどさ、爆弾のとき、何であれが爆弾だつて分かったの？」

レグルス「それがさ、分かんないんだよ。急に頭の中に映像が浮かんできて・・・。」

ルメリク「そつか・・・でもさ、それって記憶を取り戻してるって事じゃないの？」

レグルス「うーん。」

ルメリク「あつ、保安官が来たよ。」

保安官「あなたたちが通報してくれたんですね。ご協力感謝いたします。」

保安官「こいつは本官が責任を持って連行します。報酬は後でギルドの方からもらってください。」

レグルス「あ、はい。よろしくお願いします。」

保安官「最近犯罪が増えてきています。あなたたちも気をつけてくださいね。では。」

ルメリク「よし。じゃあ帰ろうか。」

・
・
・

レグルス「何かギルドの方が騒がしくない？」

ルメリク「そうだった。今日は先輩が帰ってくる日だった！」

ルメリク「先輩は遠征に行っていたんだ。だからあまり人が居なかったんだ。」

レグルス「何にせよ、はやく行こう。今日は疲れたよ。」

なんだかんだ言っで、結構馴染んでるよ僕。

何で記憶を失ったんだろう。あの時見えた映像は、僕の記憶に関係あるんだろうか・・・。

第五探検 第一印象は大切です。

シリウス「あら二人とも、お帰りなさい。さっき保安官さんが来てたわよ。」

ルメリク「何て言ってた？」

シリウス「報酬がどうとかって・・・あんたたち何したの？」

不思議がるのも無理もないかもしれない。仕事すっぱかしていった訳だし。

レグルス「実は・・・」

・・・

シリウス「ふうん。本当ならお手柄よ。A級犯罪者だったらいいし。」

レグルス「A級犯罪者？何ですかソレ。」

ルメリク「えつとね、犯罪にもレベルがあって、ソレに応じてAとかBとか決まるの。」

シリウス「そう。泥棒とかなどはEやDランク。誘拐とか殺人とかになるとCからAぐらいね。」

おそらく、ランクが高いほど大変な仕事だ。Aランクだから、今日は大変な仕事だったのだろう。

シリウス「報酬はあんたらの部屋に送ってあるから。あと、先輩たちが帰ってきたわよ。」

ルメリク「成果はあったんでしょうか？」

シリウス「さあね。もうすぐ報告に・・・あつ、来た。」

???「シリウス。今回の報告に来たぞ。えーとまず・・・」

二人は熱心に話しこんでいる。顔から察するになかなか良かったらしい。

レグルス「ねえルメリク。この人は・・・？」

ルメリク「この人はシャムさん。僕たちの先輩だよ。ギルドナンバー12の実力をもってるんだ。」

白い毛並みと、片方だけ赤い耳。そして鋭く尖った爪。ルメリクによると、ザングースという種族らしい。

???「見ない顔だな。シリウス、コイツが新入りか？」

シリウス「ええ、そうよ。レグルス君って言うんだけど、どうやら記憶喪失らしくて。」

レグルス「あつ、どうも、レグルスって言います。」

シャム「ああ。よろしく。なんかあったらいつでも言ってくれ。」

シリウス「シャムは見た目は怖いかもしれないけども、意外と世話焼きだから。話し相手にはなってくれるかもよ。」

シャム「ああそうだ。シリウス。お前俺らがいないときに何本酒飲んだ？」

シリウス「えっ！？2本だけど・・・」

シャム「嘘付くな。10本はあったぞ。お前の部屋に隠してあった。」

シリウス「なっ・・・勝手に部屋に入っただのね！」

シャム「ああ入ったさ。アルコールの匂いがぶんぶんしたぞ。」

シリウス「うら若き乙女の部屋に無断で入るなんて・・・！」

シャム「朝っぱらから酒飲んでる奴のどこが乙女なんですかね!？」

うん。シャムさんが正しい。

シリウス「はいはい悪うございました。所でエルナト見なかった？」

シャム「エルナトなら部屋で休んでると思うが。なんで？」

シリウス「研究用の装置が届いたって伝えてくれる？取りに来いて。」

シャム「分かった。伝えとく。」

シャムさんは部屋に戻っていった。

シリウス「心配してくれるのはありがたいけども、少しお節介すぎるのよね・・・。」

レゲルス「でも、いい人だと思いますよ。」

シリウス「まあね・・・。否定はしないけど。」

???「シリウスッ！例の物が届いたってホント!？」

シリウス「ああ、エルナト。届いてるわよ。確か・・・ネバネバ菌培養キットだったかしら。何に使うのよコレ。」

エルナト「色々必要なのよ。薬とか作るときにね。」

ピンク色の毛並みと、尻尾の先に付いた青い玉(?)のような物。ルメリクが言うには、デンリュウと言う種族らしい。

エルナト「新入りくんってこの子の事？」

シリウス「ええ、そうよ。間違っても解剖とかしないように頼むわよ。」

エルナト「保障はしないよ。」

してください。

エルナト「ま、よろしくね。私はエルナト。24歳。この毛並みは・
・俗に言う「色違い」ってやつね。」

色違い。遺伝子バランスが崩れる事によって色が変わるらしい。エルナトさんは物知りだ。

エルナト「ラボ使っわよ。いいよね？」

シリウス「良いけど、ちゃんと掃除しててね。あと、ご飯の時にはちゃんと来なさいよ。」

エルナト「ん。分かった。」スタスタ

シリウス「二人とも、解剖されない様に気をつけてね・・・。」

ルメリク「はは・・・。」

笑い事で済まされればいいんだけどね・・・

・
・
・

シリウス「遅いわね・・。なにやってんのかしら・・・。」

レグルス「誰を待つてるんですか？」

シリウス「ん？ああ。まだ一人帰ってきてないのよ。」

ルメリク「あ、本当だ。エリアスさん帰ってきてない。」

シリウス「道草食うようなキャラじゃないのにね。何かあったのかしら？」

レグルス「キャラって・・・」

確かに遅いかもしれない。もう太陽は沈んでいる。

ルメリク「探しに行きますか？」

シリウスが考え込む。

シリウス「うーん・・・後少し待って来なかったら探しに行きましようか。」

ルメリク「どうやら必要ないみたいですね。帰ってきましたよ。」

エリアス「すまない。遅れてしまった。」

エリアスさんはルカリオと言う種族らしい。

ルメリク曰く「べらぼーに無口」な人らしい。

シリウス「別にいいけども・・・。あんたの上に乗ってるの誰よ？」

エリアスさんの上に一匹のピカチュウが乗っている。見た所自分た

ちより年下っぽい。

エリ阿斯「勝手について来た。」

???「勝手について来ちゃった。」

とても幼い声。10歳程度といった所だろうか。

シリウス「いや、何だよ。何で付いてきてんのよ」

???「そりゃあ、エリ阿斯さんの探検隊オーラに引き寄せられたんですよ。」

エリ阿斯「引き寄せたつもりは無かったんだけどな。」

???「自ら引き寄せられていったんですヨ。重力ですよ。」

レグルス「重力って・・・なんか違う。」

シリウス「もういいわ。エリ阿斯。明日もこの場所に戻して来なさい。」

レグルス「犬ですか・・・この人。」

???「冗談ですよ。ギルドに入りに来たんですよ。」

少し焦っているようだ。しゃれのつもりだったのかもしれない。

シリウス「本当？大人に嘘つくもんじゃないわよ。」

「???「嘘じゃないですって。」

シリウス「分かったわ。付いてきなさい。」

どう見ても引っ張っているようにしか見えませんよシリウスさん。

「???「あゝれゝたゝすゝけゝてゝ」

・・・引っ張っていいです。

・・・

食事時

シャム「はい。じゃあ手を合わせて。いただきます・・・」

シリウス「ちょっと待った!」

食堂に駆け込んできたシリウスさん。右手にピカチュウを掴んでいる。

ルメリク「あのピカチュウ、耳引っ張られて痛そう。」

レグルス「う・・・うん。」

シリウス「今日は皆にお知らせがあります。新しくギルドに入ってきた子です!」

・・・あたりが静かになる。みんなピカチュウのほうに注目している。

???「新しくギルドに入ったフェインです。よろしく願います。」

シリウス「彼には探検隊ナガレボシに入ってもらってから。良いわよねレグルス君？」

レグルス「ええ、まあ。」

シャム「よし。じゃあ取り直して。いただきます。」

いただきます。

・・・

ルメリク「ふいふ疲れたあ。」

そういつてルメリクはベッドに倒れこむ。

フェイン「疲れましたねえ。」

ルメリクの真似をしてベッドに倒れこむ。そこ僕のベッドです。

ルメリク「まあ適当によろしくね。フェイン君。」

フェイン「ええ、二人ともよろしくです。」

レグルス「そういえばさ。ここに来る前は何してたの?」

フェイン「何かです。」

ルメリク「ええ、何かって何よ?」

フェインが微笑む。悪い子じゃなさそうだ。

一瞬見せた大人びた笑顔が何だったのかは聞かない事にしよう。

第五探検 第一印象は大切です。（後書き）

いやあゝひどい目にあったねえ。

フェイン「まったくですよ。まさかIDとパスワード忘れるなんて・
・・」

反省しています。

フェイン「そのせいで僕の登場が遅れたじゃないか。」

反省していますって。ハハッ

フェイン「なんでちょっと笑ったんだよ・・・」

第六探検　オルフェウス鍾乳洞

コンコンと夜のギルドにノックの音が響く。

「みんな起きてる？シリウスだけど。」

「レグルスが寝てるんで静かにお願いしまあゝす。ってちょっとフエイン。やりすぎだつて。」

「え？いいじゃないですか。面白いし。」

なんか嫌な予感がするけど、入って見るしかない。

シリウスはドアを開けようとする。中から静かに笑い声が聞こえてきた。

「なにやってんのよ一体・・・」

ガチャ

「ちょ、あんたたち、何やってるのよ!？」

部屋に入るなり叫ぶ。少し笑い声が混じっているような気がしないでもない。

「え？何つて。」

「落書きですけど。」

そう答える二人の手にはサインペンが握られている。

「それはレグルス君が可哀想でしょ。・・・ぷっ。」

悪乗りするようにフェインが落書きを書き足す。

「これでっ。」

レグルスの額に「肉」と書き足している。とっても楽しそうだ。

「ぷっ。ちょ、ちょっとやめてよ。くっ。」

「ふっ。あはははっ！」

夜空に吸い込まれていく三人の笑い声。だんだんと大きくなっていく。

がちゃ。

「あはははは・・・はは・・・は。」

瞬間。三人は絶望を感じ取る。

それもそのはず。三人の前には・・・

「なにやってんだお前ら!!」

シャム。ギルド内口うるさいランキング第一位。ちなみに二位からは不明。

まあ当然こんな人が立ってれば凍りつくのも当然で。

（どうします先輩。許してくれそうにないですよ。）

（どうしますって言われても・・・元はあんたから始まった事だから、フェインが謝ってよ）

（ええ！全部ボクのせいですか！！先輩だって楽しんでたくせに。）

（どっちでもいいから謝りなさいよ。私にもとばかりが来るじゃないのよ）

（・・・所で先輩。なんで僕たちテレパシーで会話できてるんですか？）

（・・・なんでだろう。）

ちなみにこの後、三人ともお説教食らいましたとさ。

・
・
・

「ねえルメリク。昨日皆に笑われる夢を見たんだけどさ。」

「（ギクッ！）そ、そうなんだあゝ」

ルメリクの目が泳いでいる。何が昨日あったのだろうか。

「フェインくんは何か知らない？」

「（何でボクに振るんだよ！）し、知りません。これっぽっちも全く。全然。」

「じゃあさ、何で二人とも目が泳いでいるのさ？」

「べ、別になんでもないよ。それよりさ、シリウスさんから呼ばれてるんでしょが。」

「そ、そうですね。早く行きましょよ。」

怪しい。ますます怪しい。後で問い詰めてやろう。

「……」

「な、なんだよレグルス。早く行くぞ。」

「……分かった。」

・
・
・

シリウスの部屋

「みんな集まったわね。今日はダンジョンに行ってもらおうわ。」

「依頼の話ですか？」

「ええ、そうよ。地図を出して。」

「レグルスさん。地図、地図。」

「そうだよ。早く出して。」

二人とも持ってきてないのかよ！心なしが胃が痛んだような気がする……

がさつがさつ

鞆の中から地図を出す。覗き込む二人。いつか思いっきり殴ってる。

「はい。出したわね。レグルス君の愚痴は後で聞いてあげるから、その左上を見て。」

言われるがままに地図の左上の方を見る。

「オルフェウス鍾乳洞？ここって確か……」

「そう。先日発見されたばかりのダンジョンよ。ニユースでやってたわよね。」

「ああ、やってましたね。絶滅危惧種の花がどうか。」

「オルフェウスの花……でしたっけ？」

フェインが口を開く。その言葉を聞いたシリウスが反応する。

「……フェイン君。なんで知ってるの？最重要機密のはずなんだけども。」

「……えーと、お星様が教えてくれました」

ごまかしになつてないぞ、それ。

「・・・いいわ。後でたっぷり聞かせてもらうから。それよりも依頼の内容よ。」

フェインの顔が真っ青になる。ご愁傷さまです。

「依頼の内容は、最奥部にある花をとつて来て欲しいとの事。この依頼には依頼者も同行するみたいね。集合場所は鍾乳洞の前。分かった？」

「先生！バナナはおやつに入りますか？」

フェインは色々とアホだ。この時確信した。

「じゃあ、行こうか。フェイン、置いてくよ。」

フェインの渾身のボケ（？）を思いつきスルーするルメリク。見習いたいぐらいのスルー力だ。顔を見る限り意図的なんだろう。

・・・

オルフェウス鍾乳洞前

「確か、赤いスカーフを巻いた口コンだったよね？」

少し困った表情を見せながらルメリクが口を開く。

「確かね。何処にもいないけど・・・」

フェインも困っている。それもそのはず、依頼者がいるはずの所に誰もいないからだ。

「まさかとは思っけど、もう入って行ったんじゃ・・・」

思っていた事を口にする。

「そんな訳ないでしょ。ありえないって。なんだったら今日の夜ご飯のデザート賭けようか？」

思いつきり否定される。ここまで否定されるとなんか腹が立つ。

「いいよ。受けてたとう。約束破るなよ。」

「・・・あー、先輩。燃えている所水を差してごめんなさい。依頼

者の物と思われるスカーフがありましたよ。」

フェインによると、木に引っかかっていたそうだ。

「でも、それが依頼者の物ってどうして分かるのさ。」

ルメリクが疑う。当然だろう。スカーフの色が一緒だったとしても、それが依頼者の物かどうかは判断できない。

「それはそうですけど・・・」

突然フェインが走り出す。

「ちょっと。何処行くのさ！」

あわてて追いかける。見失っては大変だ。

・・・

オルフェウス鍾乳洞1F

「フェイン！ちょっと止まれ！！」

はあはあと荒い息を吐きながらレグルスが言う。

「でも！早く行かないと！！」

フェインが必死の形相で訴えてくる。

「落ち着けフェイン。何があったんだ。」

「聞こえたんです。女の子の悲鳴が。」

女の子の悲鳴・・・そういえば、依頼主のロコンも女の子だと聞いている。

「じゃあ、あのスカーフは・・・」

「ああ、おそらく・・・」

顔を見合わせて真っ青になる。最悪の事態しか想像できない。

「い、急ぐぞ！！」

第六探検 オルフェウス鍾乳洞（後書き）

姉が帰ってきたのでしばらく更新できません。
ご了承ください。

第七探検 洞窟探検 (前書き)

遅くなりましたサーセン

第七探検 洞窟探検

そんな訳で、オルフェウス鍾乳洞を進んでいる僕たち。そんな訳がどんな訳か分からない人は前の話を読んで欲しい。

「しかし・・・変な場所だよねここ。方向感覚がぐちゃぐちゃになるって言うか・・・」

ルメリクがつぶやく。確かに変な場所だ。しかしそれ以上に変な奴が一匹。

「ねえフェイン。さっきからなにをやってるの？」

ルメリクが素朴な質問を口にする。自分も気になっていた所だ。

「何って・・・エコーロケーション反響定位ですけど。」

エコーロケーション彼が反響定位と表すそれは、誰から見ても石を壁にぶつけているだけ。パツと見て分かる人はまずいないだろう。

「出来るの、それ？」

疑念の声をぶつけるが全く効果が無い。集中しているようだ。

「ねえレグルス。反響定位って何？」

反響定位。ズバットなどが超音波などを用いて物や壁などの位置を探る事。超音波の跳ね返りで物の位置を判断しているらしい。何故僕がこれを知っているのだろう・・・

「へー。フェインって超音波が出せるんだ。」

感心したようにうなずくルメリク。

「うん。ズバットの反響定位はそうだね。でも、ボクのは違っんです。」

音響定位をやめ、こちらの方を向くフェイン。違っとはどう言う事なのだろうか？

「正確に言うなら、ボクの行動は反響定位ではありません。さっき、彼女の悲鳴が聞こえたんですけど、そのときの悲鳴の音の大きさや跳ね返りを利用して、彼女との距離を測ろうとしているだけです。」

まるで誰にでも出来るかのような口調で話すフェイン。一応言うておくけれども、誰にでも出来るわけじゃないからね。

「それって凄い事だね。ただのピカチュウが何でそこまでできるのさ……」

フェインが話す。若干引いて見えるのはきっと気のせいだろう。いや、気のせいにしておこう。

「実はボク、生まれつき耳が良いんです。そのせいで村の人から異端児だって……」

悲しそうに話すフェイン。そんなフェインを見て、レグルスたちは黙る事しか出来なかった。

「ごめん。そんな過去があつたなんて・・・思わなかったから。」

ルメリクが申し訳なさそうに口をひらく。それを聞いたフェインは悪戯っぽく笑い、そして・・・

「まあ、嘘なんですけどね」

と言った。その言葉に彼らは黙る事しか出来なかった。別の意味で。

「それよりもほら、依頼人の場所が分かりましたよ。早く行きましようよ。」

とフェイン。本当ならほめるはずだが、今回は違う。

スタスタと去っていくフェインを眺めながら、ルメリクが呟く。

「後でおしおきが必要だな。」

と。

...

オルフェウス鍾乳洞2F

2階は1階よりもひんやりとしていた。下に潜っているので、普通に考えればあたりまえだ。

でも、一つだけ疑問に思う事がある。ポケモンがいない事だ。普通のダンジョンなら少なからず襲ってくるポケモンがいる。だが、このダンジョンにはいない。

「気配すら感じないね・・・」

ボソツとレグルスが呟く。

「そんな事ないですよ。ほら。」

フェインが指差した先にロコンの少女が倒れているのが見えた。急いで近づいていくとやっぱり依頼主の少女だった。

「おい！大丈夫か！！」

近寄っていった瞬間、突然辺りからニドランの群れ。

「囲まれた！？」

周りを見渡すと、一際大きいニドランが見える。あれがボスだろうか？

「レグルスさん。ルメリクさん。雑魚はボクが散らします。二人は大きいのを狙ってください。」

「分かった。でも大丈夫？8体も相手にするなんて・・・」

レグルスが心配そうに言う。

「大丈夫ですよあんな雑魚。それよか、先輩たちのほうが大変ですよ。」

フェインが言う。

「分かった。じゃあがんばれよ。」

1、2、3の合図で散らばる三匹。狙いはもちろん・・・

「おまえだぁッ！」

バツと飛びかかるレグルス。

「食らえ！ほのおのツメ！」

高温に熱したツメをボス格であるツンドランに叩きつける。

「ッ！効いてない！」

タイプの問題ではなく、単純に硬いのだ。しかし無駄だったわけではないようだ。

「ルメリク！今だ！バランス崩してる！」

「OK！ぶっ殺しやるわ！」

ルメリクの口から水の塊が発射される。そこまで効いている訳ではないが、十分なダメージが与えられている。

「とどめだあっ！ほのおのツメ！」

一回り大きな体をしているニドランに、思いっきり炸裂する。・・・痛そう。

「ふう・・・どうにかなったね。って、フェインは？」

ルメリクが不思議そうに周りを見渡す。確かにいない。

「おいフェイン！って、いた。何してたのさ？」

「あまりに暇だったんで、依頼主のロコンちゃん送り返してきた所です。」

「暇？あんだけいたのに？」

「ちょっと威嚇したら逃げちゃいましたよ。先輩たちが戦ってる所をお茶すすって見てました。」

フェイン・・・恐ろしい子。

「つーかさ。戦ってたの見てたんなら助けてよ。」

ルメリクが口を開く。ごもつともです。

「はっ！その発想はありませんでした！」

・・・もつ何も言つまい。

オルフェウス鍾乳洞B3F

「さて、この辺で依頼内容を確認しておこうか。」

ルメリクがいかにもリーダーっぽい台詞を吐く。

「確か・・・オルフェウスの花を取って来いって言う依頼だったね。」

同意を求めるようなレグルスの発言に、二人ともうなずく。

「確か6階ぐらいに咲いてるって言ってました。青白く光ってるからすぐ分かるそうです。」

フェインが言う。青白く光る花・・・光るの！？

「別名月光草とも言われています。月の光を蓄えて光るから月光草だそう。あ、これは豆知識ですが煎じると薬になります。」

「どうでもいい情報ありがと。」

どうもそっけない。そんなルメリクを見て、僕は苦笑いする事しかできなかった。

（なんとなく・・・理由は分かるよ・・・）

「じゃあ、そろそろ行こうか。」

またもや仕切るルメリク。もうコイツがリーダーでいいんじゃないかな。まる。

・・・

オルフェウス鍾乳洞B4F

「ていやっ！たく。しつこいたらありやしない・・・」

「クソッ！何でこんな急に敵が！」

そう、3階までは敵どころか人の気配すらしなかった。そのはずが、何故か4階から急に敵が出てきている。

「何でだと思います？先輩。おわつと、危なっ！」

器用に避けながら質問するフェイン。その姿が少し面白かったのは内緒だ。

「内緒にしても無駄ですよ。先輩。バレバレなんですからねっ！」

最後の言葉を言った瞬間、フェインの前方にいたハスボーが思いっきり吹っ飛ばされる。・・・ピカチュウのサマーソルトなんて始めて見た。

最後の一匹だったのだろうか。それとも恐れをなして逃げ出したのだろうか。個人的には後者の方が良い。皆殺しなんて印象悪いしね。

・・・

オルフェウス鍾乳洞B5F

「オウお前ら！我らニドキング団の子分達を、よくも痛めつけてくれやがったなア！」

がらがら声が周りにこだまする。階段を降りた瞬間、目の前に大きなニドキングが一匹。俗に言うボス戦フラグと言う奴だ。

「ニドキング団？」

「そうさ我らがニドキング団！この洞窟を根城にしているんだ！！」

特有のがらがら声で威張ったように話す。

「ニドキング団・・・名前がださい・・・」

あ。この声は僕です。レグルスです。

「んなつ！我らがひいひいじいちゃんから受け継がれてきたこの名前がださいと・・・へブツ！」

「話が長い。」

ルメリクのドロップキックをもろに食らうニドキング。すっげー痛そう。

「ちよっ！まだ話は終わってグボハッ！」

今度はフェインのアップパーをもろに食らう。なんかもう・・・ご愁傷さまで。

「や、やめ、やめてくれっ！」

ニドキングは涙を浮かべ、こちらを見ている。可哀想だしこの辺で・

ふと二人と目が合った。二人ともGOサインを立てている。どうしよう・・・

助けてあげる

↓

ご期待に応える

助けてあげる

↓ ご期待に応える

ピロリン♪

「ひっ！嫌だああ・・・」

完璧に怯えている。これはチャンスかもしれない。

「じゃあ、この先探検隊や迷い込んだ人たちを襲わないって誓う？」

「は、はい！だから助けてください・・・」

「分かった。じゃあ・・・」

ゴガッ！と言う鈍い音を後頭部に受けたニドキングは倒れる。気絶したようだ。

「さ。行こうか。」

そういつて振り返ると、二人は笑顔だった。若干引きつっていたけど。

・
・
・

オルフェウス鍾乳洞 B 6 F

ずいぶん開けた場所に出た。

「ねえ。アレがその、オルフェウスの花だっけ？」

レグルスが指差した先には、青白く光っている花がたくさん。

「どうやら群生地になってるようですね。少し摘んで帰りましょう。」

「ねえフェイン。群生地って何？」

ルメリクが聞くと、フェインはそんなのも知らないのかといった表情で答える。

「群生地とは、同一種類の植物が一箇所に固まって生える事ですよ。ちなみに生き物の場合は群棲といいます。読み方は同じですけどね。」

「ふーん。」

感嘆というよりは聞き流している感じた。本当にルメリクは分かっているのだろうか。しかしそれにしても・・・

（フェインのキャラが読めない・・・賢いの？バカなの？一体どっちなんだ？）

レグルスは悶々と悩んでいる。その答えはきつと出ない。

「よいしょっと。さ、帰ろう。こんだけあれば十分でしょ。」

ルメリクが喋ると、それに反応したようにフェインが道具を取り出す。

「じゃじゃーん！エルナトさん特製あなぬけのたまー」

某青狸のような声色で道具を取り出す。古い方に良く似ている。

「えーっと。何処にしまったの？」

ルメリクが困惑している。

「ふふふ・・・2・5次元ポケッ」

「わーっ！ダメダメ！！大人の事情が絡んでくるから！」

色々と問題になりそうなやりとりだけど・・・大丈夫だね？

こうして僕らは無事に仕事を終え、ギルドに帰るのでした。この先にどんな事が待ち構えてるかも知らずに・・・

第七探検 洞窟探検（後書き）

いやはや。遅くなっちゃったね。更新するの。

レグルス「遅すぎるでしょう！何やってたの!？」

ゴメンゴメン。ダンガンロンパに夢中になってしまって・・・

ルメリク「何それ？ゲーム？」

うん。ゲーム。

レグルス「へえ。更新もせずにならたらゲームしてたの・・・」

YES ♪

ま、そんな事はさておき、今回はなんとレグルスくんが女の子に・・・

・

フェイン「なんだってー（棒）」

ルメリク「元から女の子だと思ってたー（棒）」

レグルス「お前ら・・・」

そういえば、ユーザー以外の方の感想もOKにしたので、じゃんじやん感想を送りつけてください。まってまーす。

まっ
てまー
す(泣)

第八探検　ボクの正体と疑惑の眼差し（前書き）

この話からストーリーが動き始めてきます。

どうでもいいですが、この話はかきあげるまでに4時間かかりました。

あと、途中の三人称視点の時がかなりきつかったです。

勝手ながらタイトル変更させて頂きました。

第八探検 ボクの正体と疑惑の眼差し

「ん。お帰りなさい。花はどうだったのかしら。」

ギルドに帰った僕らを包んだ第一声は、元から赤い顔をもっと赤く染めたシリウスさんだった。

「うっわお洒くさ！なんかシャムさんも倒れてるし。」

鼻をつまみながら、倒れているシャムさんを指差すフェイン。

「そんな臭くないわよ！10本しか呑んでないし。シャムは4本目でダウンしちゃったけど。」

むしろ四本目まで耐えたシャムさんが凄いと思う。そういえば・・・。

「依頼主のロコンちゃんはどうしたんですか？フェインが送り返したはずだけど。」

「ん。アタシの部屋で待ってるわよ。心配してたようだから、早く行ってあげなさい。アタシも行くから。」

「あ、僕はシャムさん部屋に運ぶから。三人で行って来て。」

ルメリクがシャムさんを引きずりながら言う。

「ん。分かった。」

僕はフェインを引っ張るようにシリウスさんの部屋に連れて行っただけ、フェインがそろそろボケようとした気がするから。

ガチャ。ドアを開くと中にいたのは、さっき倒れていた少女だった。

「あつ！えつと、探検隊の方・・・ですよね。」

僕の顔を覗き込むように言う。か、可愛い・・・。

「せんぱい。元から赤い顔がさらに赤くなってどうしたんですかあ。」

フェインがジト目でこちらを見てくる。

「べ、別に。なんでもないって。それよりさ、なんで僕たち待たずに先に行ったの？」

話を逸らすために別の話題に振る。もっとも、最初から聞くつもりだったけれど。

「そ、それは・・・。時間が・・・無かったから・・・。」

「時間？出発時間前には来たはずだけど・・・。」

「そ、それは・・・。」

「はいはい。これ以上聞くのはタブーよ。例えどんな理由があろうともね。」

シリウスさんが割って入る。こう言われたらしょうがない。

「まあ・・・いいですけども。」

フェインが少し残念そうに言う。

「あ、あの。花を届けてくれて有難うございました。それでは。」

小走りで去っていく彼女。そんな彼女の尻尾を目で追いながら

「なんだったんだろう。」

と一人つぶやく。その言葉に答えるように

「なんでもないわよ。」

とシリウスさん。

「なんでもないから、レグルス君は部屋に帰ってて。」

ん？僕だけ？

「ボクはこれからシリウスさんと話があるから。」

そう言っ僕を部屋の外に押し出すフェイン。ボタンと扉を閉められ、さらには鍵までかけられた。

（シリウスさんとフェインの話って一体……）

ドアに張り付き聞き耳を立ててみる。……フェインの声が聞こえる。

「あ・・口・・花・・つ・・て・親・・病・・・薬・・」

途切れ途切れにしか聞こえない。

「・・・え・・そ・・り・・わた・・答・・・の・・手紙・・」

小声で話しているみたいで、途切れ途切れにしか聞こえないが、声の高さから、おそらくシリウスさんの声だ。

ん？あれ。心なしか地面がバチバチして……

バン！耳をつんざくような轟音の後、全身に焼け付くような痛みが回る。思いつきり地面につつぷして、僕はそのまま意識を失った。

・
・
・

「何をしているのかしら。」

シリウスが訝しげに、ドアの前に立っているフェインを睨む。

「ドアの向こう側に聞き耳立てているバカがいたんで、退治しただけです。」

普段の声からは想像できないほど冷たい声で話すフェイン。

「そう。分かったから席に戻って。」

「さいですか。」

水をふくんだタオルを振り回せば凍りつく。この部屋の空気はまさしくそれだった。

「んで、本題に戻るわよ。あの手紙はあなたが書いた物ね？」

キツとフェインをにらみつけるシリウス。防御が下がりそう。

「はい。なかなか達筆でしょ。」

にらみつけられた事も気にせず、フェインはおどける。

「そう。じゃあなんで手紙に「あの人」の事が書いてあったのかしら。なんであんなに「あの人」を知ってるの。」

「さあ、何ででしょうね。それについてはノーコメントで。」

シリウスをおちよくなるような仕草で話すフェイン。いつものおちよくりとは何かが違った。

「そう。答えないならしょうがないわ。その代わり、次の質問には絶対答えて。」

ぴしゃりと言い放つシリウスに、フェインは少し考え込みながら

「分かりました。構いませんよ。何が聞きたいんですか？スリーサイズは答えませんよ。」

「分かったわ。じゃあ質問に答えて。」

「貴方は何者なの？」

シリウスがそう言い放った。

少しの静寂の後、フェインが唐突に口を開く。

「スリーサイズは完全に無視ですかそうですね・・・。」

少し残念そうにも見えるフェインの顔は、余裕に満ちていた。

「あんたのスリーサイズなんて誰も期待してないのよ。」

不機嫌そうにシリウスが話す。

「おかしいと思ってたのよ前から。新人の癖に強すぎるし。前にどつかのギルドに入ってたなら別だけでも、あなたにはその形跡が無い。それに、知らないはずのオルフェウスの花のことを知っていた。それが薬になる事もね。」

まくしたてるようにシリウスは話すと、フェインが深くため息を吐き、

「もし嘘を付いたら？」

と聞いた。その言葉にシリウスは小さく、

「死なない程度に痛めつけて自白させるわ。」

と呟いた。

「そーゆーのは慣れっことですけどね。ま、良いでしょう。お話しします。信じてくれればの話ですが。」

諦めたようにフェインは首を左右に振る。

「さて、じゃあ話します。ボクが何者なのか。」

・
・
・

僕が目を覚ました時に見た物は、見慣れたギルドの天井だった。

「ん？あ、レグルスが起きたぞ。」

シャムさんが僕を覗き込む。まだ少しシャムさんの顔は青ざめている。

「うーん……。あれ、ここは一体……。」

周りを見回すと、見慣れすぎてむしろ一瞬分からなかった僕たちの部屋。

「あ！レグルス起きたんだ。よかったあ。」

そう言いながら部屋に入ってくるルメリク。その顔には安堵の表情が浮かんでいた。

「後でエルナトさんにお礼言っておきなよ。エルナトさんが見つけて運んでくれたらしいから。」

「んで、肝心のエルナトは何処にいるんだ？台所の方から煙があがってたがひよつとして……」

「うん。そのひよつとして。レグルス君のために料理作るって言うてたよ。」

「分かった。止めてくる。」

そう言い残してシャムさんは出て行った。若干焦っていた様だ。

「なんで焦ってたんだろうね？」

ルメリクが疑問そうに僕に話しかける。その疑問はすぐに解消された。なぜなら台所の方から、

「いやよ。私が作るんだから！」

とか、

「ふざけんな！何が悲しくて触手が浮いてる物食わせるんだよ！」

とか

「死なない気がするから良いじゃない！後これは触手じゃなくて、れっきとした薬よ！」

とか

「一生もののトラウマ植えつける気か！もういい。俺が代わるからあんたは看病しててくれ。」

とか聞こえてきた。

「・・・危うく死ぬ所だったね。」

「・・・うん。」

・・・

「んで、聞かせて欲しいのよ。なんで君があそこで倒れてたのか。」

エルナトさんが訊ねて来る。とはいってもあまり答えることができない。

「うーん。確か聞き耳を立てていたはずで、地面からバチッ！って音が聞こえて・・・気が付いたらここだった。」

「聞き耳？一体何に聞き耳を立ててたんだ？」

シラムさんが不思議そうにたずねて来るけど・・・

「思い出せないんだ・・・そこだけすっぱりと抜けてる感じで・・・」

「記憶喪失って事？」

ルメリクが心配そうに聞いてくる。

「おそらくなんだけど、もしもバチッ、と言う音が電撃だとしたらつじつまは合うわね。」

「エルナトさん・・・。つじつま・・・ですか。」

「そう。電気によって一時的に記憶障害になる可能性もあるって事。脳の中の記憶を司る場所にかなり大きめの電流が流れ込めば、可能性はあるわよ。ただ・・・。」

「ただ？」

「大きいって言うても、かなり大きいよね。それこそ頭に雷がピンポイントで直撃しないといけないぐらいよ。私には出来ないわ。」

うーんと考え込むエルナトさん。それに割って入るように

「フェインなら可能ではないのか。ピカチュウの電気の力はかなり強いと聞いたが。」

とエリアスさん。あ、いたんだ。

「え、エリアスさん。何時からここにいたんですか!？」

聞く所そっちじゃないだろうが。

「最初から居たのだがな……。まあ良い。それこそフェインに聞けば良いだろう。」

ちよつと膨れてるようにも見える。

「だけでも、フェインは今話してるって、シリウスさんが……」

「さっき話し終わったようだがな。部屋から出てくる所を見たぞ。」

エリアスさん万能説。

「さっそく聞いてこよう。いこ、レグルス。」

「あ、うん。」

・・・

「ええ〜！ボクがレグルスさんを襲ったって事ですかそれ！」

フェインが驚いている。

「うん。これしかつじつまが合わないんだよ。」

ルメリクが言うと、フェインが反論する。

「だって、ドア越しに電撃打てるわけ無いじゃないですか。それに、先輩襲ったらやばいんでしょう。罰せられるとか何とか・・・」

「うーん。それもそうだね・・・。あと、話ってなんだったの？」

僕が尋ねると、フェインは少し考え込んだ後、

「内緒です。」

と言って笑った。目が笑ってないけど。

「それはそうと、明日は休みがもらえるらしいですよ。祭りがあるらしいです。ボクは行く所があるんで、二人でよろしくです。」

何をよろしくされたのか分からない。

「あ、ごめん。僕も用事があって出かけなきゃいけないの・・・。」

ルメリクが弱ったように僕に言う。

「別に良いよ。」

と言ったが本当は少し寂しかった。

男一人で祭りはせつないっていうかなんと言うか……。

第八探検 ボクの正体と疑惑の眼差し（後書き）

いよいよフェイン君の本性が明らかになってきましたね。

いったい彼は何者なのか！？何故知りえない事を知っているのか！？

あとパソコンが頻繁にフリーズするのは何故なのか！？

レグルス「最後のは関係ないよね。」

．．．うん。

第九探検 祭囃子と笛の音（前書き）

今回の話は、春の祭りの話です。

決してシーズンはずしたとか言わないように。

曾我氏お兄さんからの約束だぞ

お願いだからな。絶対だぞ（泣）

第九探検 祭囃子と笛の音

ええと、はい。僕は今、一人でお祭りに来ています。自分で言うのもなんだけど、凄く切ない気持ちになります。はい。

「はあ。何でこんな事になったんだっけ……。」

そう独り言を呟きながら、さっき買ってきたわたあめを頬張る。店のおじちゃんが少し哀れむような目で渡してくれたのを多分一生忘れない。

少し歩いていくと、さっきまでの静けさが嘘のようになった。屋台から聞こえる音や、祭囃子などの音がぶつかり合って、凄くうるさい。が、その中で特に目を引く声があった。

その声ができる方向に目を向けると、どこかで見たようなロコンと、にへらにへらと笑いながらロコンと話しているブイゼルがいた。少し耳をすませてみると、簡単に話し声が聞こえた。

「いやですよ！離してください！！訳が分かりません！」

こっちはロコンの声だろう。昨日話したばかりだから、よく分かる。恐らく依頼の時のロコンだ。

「事件の香りがするんですよ、いいからご同行願います、はやくはやく」

こっちはブイゼルの声だろう。声が若干太い事から、おそらくは男だろう。

（これってまずい事なんじゃ・・・）

もしかしたら誘拐事件に繋がるかもしれない。そう思った僕は、どうにかして、あのロコンを助けようとする。

「一人なんてさらに怪しいじゃないですか」

一人だと怪しい。つまり、二人になれば良いのだろう。だとすれば・・・。

「ごめん！待った！？」

そう言いながら駆けてくる僕に、ロコンは目を丸くした。だけど、そんな事構ってる暇は無い！

「ごめんごめん！仕事が終わらなくてさ・・・。」

必死に芝居を続ける僕。その姿を見たのかブイゼルは残念そうに

「なんだあ・・・お二人だったのか・・・。」

と言い、がっくりと肩を落として去っていった。

「あ！あの！？えと・・・えつとお・・・。」

戸惑っているロコン。無理も無い。最初から説明する事にした。

「ああ、なるほど。助けてくれてありがとうございます。確か探検隊の人でしたよね。」

可愛らしい仕草で首を傾げ、こっちの目を覗き込む。僕の目はともかく、彼女の瞳は綺麗な栗色をしていた。その瞳を見つめると、ほんのり頬が暖かくなるのを感じる。

「えっと・・・私の顔に何かついてます？」

「えっ！？い、いや別に／＼／」

・・・あんまり見つめていてもだめだな。そう思った僕は話題を変える事にした。

「さっきのブイゼルって、知ってる人なの？」

「いや・・・多分知らない人だと思いますけど・・・。」

少しげんなりしているようだ。

「あの・・・もし良かったらもう少し一緒にしても良いですか・・・？」

その言葉に、僕は考えるよりも早く

「別に良いよ。」

と、答えていた。これがきつと条件反射という事だろう。これは教科書に載ってもいいレベルだ。

「よかったあゝ。さっきの人がまた現れたら怖いですもんね。きちんと守ってくださいね。」

ああ、^{エスコート}護衛的な意味ですか。なんだろう……。凄く残念。

「じゃあ、一緒に行きましょう。ふふつ。異性の人と町を歩くなんではじめてだから、ちよつと楽しみです。」

楽しそうにしている彼女を見て、やっぱり^{エスコート}護衛でもいいや。と思っ
てしまう僕でした。

・・・

祭りも終盤に差し掛かり、大人たちが大分酒気を帯びてきた。中心の神輿の方から凄い音が聞こえ始めてきたので、僕は静かな所に退散した。

「あー。うるさかった。この辺は静かだけど。」

二人で岩に腰掛けると、かき氷をしゃりしゃりと食べながら口コン
ちゃんが言う。

「ええ。でも楽しかったです。・・・あれ？」

「どうしたの？」

「いや、あつちから笛の音が聞こえたような気がして……。」

「笛……ってあの笛の事？」

耳を澄ませると確かに笛の音が聞こえる。ヒトカゲに耳があるのかという質問はNGです。

「行つて見ましょう！」

「え！？あ、ちょ、分かった！」

一心不乱に走り出したロコンちゃんを追つて追つて追つて。

たどり着いた所は海岸だった。星空が海に映つて凄く綺麗に輝いている。

「すごい……。綺麗ですね。ヒトカゲさん。」

「あ、ごめん。名前言つてなかったね。僕はレグルスって言つんだ。」

「……あ、そつか。私も名前言つてなかったですね。私の名前はポラリスって言います。」

「よろしく。ポラリスちゃん。」

「ええ。こちらこそ。」

笛の優しい音色も相まって、凄くいいムードだ。だが、やっぱりあ

いつはそのムードをぶち壊す。

「あれ？レグルス先輩。何やってるんですか。」

僕の背後から、今一番聞きたく無い声が聞こえてきた。

「げっ！フェイン。お、お前こそ何やってるんだよ！」

そう。僕の背後にいたのはフェインだった。

「いや、何って言われても……。篠笛しのぶえの練習をしたとしか言えないですよ。先輩たちこそ、何でここに来たんですか？」

若干のジト目でフェインに言われた後、急にポラリスちゃんが口を開く。

「ねえ！さっきまで聞こえてた笛の音って、キミが吹いてたの？」

目をキラキラさせながらポラリスちゃんが質問する。その質問を面倒そうに受けながら、フェインがため息混じりで話す。

「ええ。そうですよ。さあ、気が散るからさっさとあっち行ってください。」

その姿に微妙にイラつきを覚えながら、若干の上目使いで話す。

「その……。篠笛しのぶえだっけ、触らせてよ。」

フェインにとって予想出来なかった事だろうか。少し焦っているようにも見える。しかし、彼はそっけなく

「嫌です。」と静かに呟いた。

しかし、こんな所で食い下がる僕ではない。

「お願い！少しだけ！」

「嫌です。」

「お願いしたら！」

「嫌って言ってます。」

しばらくこのやり取りが続いた後、咎める様にポラリスちゃんが口を開く。

「レグルスさん。彼が嫌がってるじゃないですか。止めてあげて下さい。」

空気が一気に僕にとってのアウエーになる。さすがに止めておいた方が良さだろう。

「悪かったよ……。」

そう僕が喋ると、フェインも口を開く。

「別にいいですよ。ただし、ボクが見ていない所で触るのとかもやめて下さい。」

フェインがいつもの顔で言った後、急に

「もし触ったら、殺しますよ。」

と、いつものフェインでは考えられないような言葉を吐き、表情もそれまでに見た顔のどれでもない、とても冷たく、鋭い目つきになった。

何人もの死に目を見ているような、悟ったような顔。蛇に睨まれた蛙を想像して頂ければ問題ない。思わず震えてしまうような声も相まって、僕も、多分ポラリスちゃんも怖くなった。

「嫌ですよ先輩、冗談です」

フェインが笑い混じりにそういった。でも僕は、その言葉を信じる事が出来ない。だって、彼が笑顔で塗り固めている裏に何か、見えてはいけな物が見える気がしたから。

もしかしたら本当に殺されるかもしれない。絶対に笛には近づかないと決めた僕でした。

「さて、ボクはもうちょっと練習してますが、先輩はどうします？もう戻りますか？」

「うん。そろそろ戻る事にするよ。もう夜遅いから、ほどほどにな。」

「はいはい。分かってます。もう少ししたら戻りますから。」

そういつて彼は、海岸の奥の方に歩いていった。

「ねえレグルスさん。私もギルドに連れてってくれませんか？」

ポラリスちゃんが唐突に何を言い出すのかと思えば、どうやらシリウスさんと話があるらしい。

断るわけにも行かず、僕はポラリスちゃんを連れてギルドに戻った。

・・・

↓ギルド一階 シリウスの部屋↓

ここに来るまでにワズンさんに冷やかされたけども、こんがりと焼いておいた。

まあ、そんな事はどうでもいい。ポラリスちゃんが話す事の方が大切だし。

「へえ。レグルス君もなかなか大胆な所があるのね。いいのよ。分かってるから。」

シリウスさんがニタニタしてる。誤解を解くのにかなり時間が掛かったのは忘れよう。

「あら、そうなの。私はてっきりレグルス君がむりやりに連れ込んで・・・。」

悪びれる様子も無く、シリウスさんの妄想話が続く。どんな内容かは書かないよ。

「それ以上は言わないでください。この小説が健全じゃなくなります。」

若干のメタ発言を僕がすると、ようやく話を止めてくれた。

「んで、話って何かしら？」

欠伸交じりにシリウスさんが話す。眠いから早くしろと言うサインなのだろうか。

「あ、えっと、ゼニガメさんも呼んでください。」

ポラリスちゃんが申し訳なさそうに俯く。

「いや、別にそれくらいなら良いわよ。もう部屋に帰ってきてるはず。レグルス君、呼んできて。」

「あ、分かりました。」

・・・

「ギルド寄宿舍」

部屋のドアを開けてみると、ルメリクはもう寝ていた。この前のサインペンの事もあるし、仕返しをする事にした。

用意する物は一つだけ。エルナト特製、超ハイパーめざめの種（仮称）だ。この前エルナトさんにもらったのをすっかり忘れていた。

え？この種でどうやって仕返しするのかって？それは見れば分かるよ。

僕はこの種を部屋に投げ入れ、そつとドアを閉じた。

数秒たつと、中からルメリクの悲鳴が聞こえてきた。それもそのはず、音がうるさすぎて改良したこの種のいわば試作品^{プロトタイプ}だから。

つまり、まだ音がうるさかった頃の物だ。今もその音は鳴っている。密室だからよりうるさくなるのは確定的だ。

ドアをバンバンと開けようとするが、僕が押さえつけてるのもちらん開かない。こう見えても力はあるんです。はい。

それからしばらく経つと、ようやく音が鳴り終わった。ドアを押さえつけるのを止めると、中からルメリクらしき物が出てきた。

「何・・・今の・・・。」

ふらつきながら僕に聞くルメリク。

「変な音が鳴ったから駆けつけたんだけど……。大丈夫？」

もちろん嘘だ。笑いを必死にこらえながら、シリウスさんが呼んでいた事を伝える。

「ん……。分かった……。行こうか……。」

ルメリクが少しよろめきながら、二人でシリウスさんの部屋に行った。

・・・

（シリウスの部屋）

「えーっと。みんな集まったわね。」

シリウスさんがルメリクに対して若干の不思議を抱きつつ、僕たちは集まった。

「んで、話って何なんですか？」

フェインが口を開く。ルメリクをつれてきた時にはもう居た。篠笛の事は内緒にしてほしいらしい。

「えっと、実は……。私も探検隊に入る事にしました。」

「探検隊……。ええっ!？」

ポラリスちゃんが衝撃の発言をする。僕とルメリクは驚いているが、他の二人は全く動じない。どこるかフェインは、やっぱりといった感じで彼女の方を見つめている。

「話すと長くなりますから……。また今度伝えます。良いですよね？」

「いや別に……。僕は良いけど。ルメリクはどうなの？」

「別に良いかな。早く寝たいし……。」

「じゃあまた今度ですね。」

僕らが口々に言葉を発する。落ち着いた所でシリウスさんが再び衝撃発言をする。

「あ、そうそう。キミたちのチームに入ってもらってから。」

「え……。僕たちのチーム……。どうえええ!？」

またもや二人だけ驚いている。フェインは何もかも見透かしているといった感じだ。

「あ、そうだ。まだ名前言ってなかったわよね。この子はポラリスっていうの。また明日みんな呼ぶから、その時に詳しいことは言うわね。」

「よろしくお願いします。」

あまりに急展開すぎて、僕の脳みそでは付いていきません。どうしましょう。

「さっ！解散解散。良い子は寝るお時間よ。あ、ポラリスちゃんは別の部屋だから。男三匹と一緒にさすがに嫌でしょ。」

「ええ、まあ・・・。」

こうして、また新しい仲間が加わったのでした。

・・・

（不明）

「やつほ。ディアルガ元気してる？」

そう問いかけるあどけない声に、ディアルガと呼ばれるポケモンは巨体を揺らす。

「ふむ。久しぶりだな。今回はどうだ？」

ディアルガと呼ばれるポケモンの質問に、幼い姿は首を振る。

「どうもこうもないでしょ。今回が最後なんだから。」

「ふむ。そうだったな。所で今回は何の用だ。」

「ああ、そろそろ力貸してもらうかもしれないから。」

幼いその声に、ディアルガと呼ばれるポケモンは気だるそうに、

「早過ぎやしないか？」

と言った。いや、言ったと言うべきか、おそらくはテレパシーの類だろう。

「早すぎるかも。でも、念には念を入れて言うでしょ。」

「ごもつともだな。では、準備するのでしょうか。」

ディアルガと呼ばれたポケモンは、瞬時に姿を消し、残っているのは幼い影の唯一つとなった。

幼い影は呟く。

「レグルス、ルメリク、ポラリス。俺は絶対に・・・」

呟いた声は、深い深い闇に吸い込まれていった。

第九探検 祭囃子と笛の音（後書き）

今回の話はそんなに大切ではないですね。
フェイン「最後のアレって何？」

何って・・・伏線だけど。

フェイン「いやいや。そうじゃなくて、何でボクの名前がないのかについてですけど。」

ああ、忘れてた。すっかりしてたよ。

フェイン「すっかりなんですか。ちょっとへこみましたよ。」

うそ。実はわざとやった。

フェイン「ああ、なるほど。ってええ!？」

第十探検 水晶玉と迷探偵（前書き）

フェイン「今回のタイトルって・・・。」

うん。はっちゃけすぎた結果がこれ。

フェイン「ええゝ・・・。」

あ、そうそう。キミの出番これで終わりだから。

フェイン「えっ！？ひどいよ作者！」

今回はかなり短いです。↑聞いてない

フェイン「ぶー。それではスタートです！」

第十探検 水晶玉と迷探偵

雲ひとつ無く晴れた空。そんな空を見ると、夏が近づいてきている事がよく分かる。こんな日には、きつと何かありそうだ。

「ん……。朝か……。起きなきゃな……。」

そう呟いて、僕はゆっくりとベッドから体を起こした。時計を見ると、まだ日が昇る前だった。

「二人は……。まだ寝てるのか……。」

すやすやと寝息を立てる二人の顔を覗き込む。

「ルメリクがうなされてる……。？」

安らかに寝息を立てるフェインと対照的に、ルメリクが若干うなされている。

（起こすべきだね……。）

ルメリクをゆするが、全く反応が無い。蹴っ飛ばしたり、焦がしたりもしたが、本当に反応が無い。

（どうしようかな……。ほっとく訳にもいかないし……。）

僕が迷っていると、突然ルメリクの寝顔が変わる。フェインと同じような安らかな寝顔。さっきまでの、まるで悪夢でも見せられてたかのような顔は、今は何処にも無い。

（後で聞いてみよう。なにか夢でも見てたかもしれないし。）

特に何する訳でもなかった（本当なら二度寝する予定）だったし、たまには朝日を見てみるのも良いかな。そう思った僕は、

まだ誰も（ラボに籠って変な物作ってるあの人以上）起きていない早朝のギルドを抜ける事にした。

・
・
・

く丘く

「よい・・・しょっと・・・ふう。やっと着いた。」

ギルドを抜け出した僕は、ルメリクと最初に会った丘へ来ていた。星が良く見えると評判の、通称ほしみえの丘。

別の名前がついているらしいが、ここへ来る観光客の殆どがほしみえの丘と呼んでいる。

え？何でここに来たかって？そりゃあ、あれだよ。星が見えるのなら日の出だって見えるはず。そう思ったからだよ。文句あるか。

じーっと日の出を待っている僕をあざ笑うかのように、急に雨雲が辺りを覆いつくす。

「うつわ……。降りそうだな……。」

嗚呼、^{ああ}つくづく運が無いな僕。しかし、ここで立っていても意味が無い。降ってくるまでになんとか、雨宿りできそうな場所を探すか……。

「……。なんだろ……。あれ……。」

僕の視線の先に、さいころ位の大きさの、光の玉(?)が浮いている。試しに近づいていくと、ふわふわと離れていく。まるでどこかに誘導しているみたいに。

「なんだよ……。あれ。こっちに来いつてか?」

訝しげにみつめる僕の鼻先に、雨水がポツポツと落ちてきた。それはやがて大粒の雨に変わっていく。

「うわっ！最悪。降ってきちゃった。」

ほのおタイプのヒトカゲにとって、雨は大敵だ。小雨ならいいけど、さすがに豪雨は勘弁してほしい。ふと光球の方を見ると、いかにもこっちへ来いと言っているように見える。

「行くしか……。ないよな……。?」

……

「どこかの洞窟」

光球に導かれた先は、狭い洞窟になっていた。ダンジョンと言う訳ではなさそうだが、奥のほうに道が見える。

「ぶあつくしよん！うう・・・寒・・・」

なんとか雨宿りは出来たが、いよいよ本格的に降り出してきた。しばらくは止みそうに無い。

「天気予報の・・・馬鹿野郎・・・。ふえつくしよん！」

天気予報では、今日一日晴天だそうだ。どの辺りが晴天なのか、僕には分からないんですけど。

さて、雨は凌げるが、いかんせんやる事が無い。光球の方を見てみると、奥まで来いといった感じで浮かんでいる。

「やる事ないし・・・。付いていくか・・・。」

だんだんと地下に潜って行ってるような感じがする。光球が無いと、

おそらく真つ暗で何も見えないだろう。

階段をひたすらに降りて行く。どれくらいの時間が経っただろうか。最後の一段を降りた時、目の前には・・・。

「湖・・・？こんな所になんで・・・。」

地底湖とも言うのだろうか。僕の目の前には、向こう岸が見えないほど巨大な湖が広がっていた。

光球は消え去り、残っているのは僕、ただ一人だ。不思議と明るいため、明かりには不自由しない。

辺りを見回してみると、微かにぼんやりと光っている物が、こちらへと飛んできた。その、ぼんやりと光っている物は、僕の前で静止すると、カタンと音を立てて足元に落ちた。

拾い上げてみると、それは握りこぶしより若干大きいぐらいの水晶玉だった。水晶玉の中に、なにかが渦を巻いているようにも見えた。

「なんだろう。どこかで見たような気がするんだけど・・・。」

僕は、その水晶玉に妙な既視感を覚えていた。何故かは分からない

が、僕は何処かでこれを見ている。そんな気がした。

「うわっ！」

急に水晶玉が光り出し、僕は地面にそれを叩きつける。しかし水晶玉は割れる事も無く、眩く光り続けた。光が僕を包むのにそんなに時間は掛からなかった。

・
・
・

く
？
？
？
？
く

どうやら僕は、気を失っていた様だった。目を覚ました時、辺りは地底湖ではなく、真っ白な空間だった。

あの水晶玉は、僕の頭上をぐるぐると回っている。手を伸ばしてみると、水晶玉自らが、僕の手の中に納まった。

「何なんだよ……。一体何なんだよ……。」

訳が分からない事だらけで、頭が混乱している。それを嘲笑うかの

ように、僕の頭の中に、言葉が流れ込んでいく。

『そうだったのか……。やはりッ！お前がつ！』

『嘘つき。』

『皆……。消えてしまえッ！』

『本当に……。良かったの……。？』

『に……。』

『だから……。言ったの』

だよ。お前なんか。』

『要らないん

』さよなら。』

『二度と・・・近寄るなっ！』

『助けてくれ・・・頼むから・・・。』

『お願い・・・助けてよお・・・。』

言葉と、僕の意識はそこで途絶えた。

「
いやだね。
」

・
・
・

「ギルド寄宿舍」

目を覚ます。そこは見慣れたギルドの天井だった。心配そうに覗き込むシリウスさんがいた。

「良かった！目が覚めたのね！」

嬉々として話すシリウスさんと、隣に、何処かで見たようなブイゼルが一匹。

「あれ……。一体なんで……。ここに……。」

僕の質問に、何処かで見たようなブイゼルが、頭に響く声で言った。

「丘の所に倒れてたんですよ♪以前のギルドの方だと分かっていたので、ココに運んできたんですよ♪」

「ええ。この人が居なかったら貴方死んでたかもしれないのよ。」

「死んでた・・・？一体何で・・・？」

僕の質問に、シリウスさんが若干呆れながらこう言った。

「今、かなり頭がぼーっとするでしょ？」

「ええ・・・まあ。」

「そりゃあそうよね。だって熱あるもの。それも高熱。」

そう言ってシリウスさんは体温計を見せる。・・・43。平熱が39ぐらいだと考えると、かなり高い体温だろう。

「いのちだいじに♪ですよ♪」

そうだ。思い出した。祭りの時のあのブイゼルだ。ポラリスちゃんに付きまっていた筈の・・・。

「じゃあ、私は行かないといけない所が在るから。ルハウトさん。後はお願いできますか？」

「おっおー♪おっけーですよ♪後は任せんしゃい♪」

シリウスさんが出て行つて。残されたのはベッドに横たわる僕と、ルハウトと言う名前のブイゼル。少し聞きたい事があるので、質問して見る事にした。

「あの、少し質問したい事がある」

「おっけーですん♪何が聞きたいんですか♪年齢？しわの数？それともそれとも……♪」

「いや……。違いますって。反応早いし……」

僕が迫力^{ソリ}に押される。こんな事は約一名を除いて有り得ない。そう……。フェインを除いては。

「ギルドの皆はどこに行つたんですか……？」

「ああ、自分がキミを引きずってきた時にはもう居なかったよ♪仕事つてシリウスが言つてたけど♪」

「引きずつて……。あ、いや。そうですか……」

引きずられた事に若干のショックを受けながら、次の質問に移る。

「じゃあ、次です。前にポラリスちゃんを連れて行こうとしたのは何故ですか？」

僕の質問に、少し困つたような顔をしながらも、優しく（？）教えてくれた。

「連れて行こうとした訳ではないですよ♪事件の香りがただだけで

すっ
」

「いや……。だから事件って……。」

「ああ、キミには先に話しておきます♪実は自分、名探偵なんです
ッ」

「……は？」

「そんな反応しなくても良いじゃないですか……。♪本当の事を言う
と、自分は探偵で、謎の発光現象を追っているんです」

「発光……。現象……。？探偵……。」

この発光現象が何の事か知るのは、もう少し後になるだろう。

第十探検 水晶玉と迷探偵（後書き）

また濃いキャラが・・・。

ルハウト「出てきてしまったのです」

うう・・・。我ながら若干フェインと被ってる事を否めない・・・。

第十一探検 白き獣と発光現象（前書き）

「ルメリク「ねえレグルス。僕の体に若干の焦げた跡があるんだけど。」

レグルス「な、何でだろうね……。。」

第十一探検 白き獣と発光現象

次の日、ギルドの皆と、昨日話したブイゼル（名前はルハウトと言
うらしい。）が、シリウスさんの部屋に集まった。

部屋自体は狭くないが、炎タイプが三匹（内一匹は僕）も居るため、
ものっそい暑い。辛うじて水タイプが居る事が救いだろつか。

「おい・・・シリウス・・・。全員集まったようだぞ・・・。」

シャムさんがだらだらと汗を垂らしながら、僕らに背を向けてワイ
ングラスを燻くゆらせている、シリウスさんに言った。悪役が良くやる
あれだ。

「フッフッフ・・・。全員揃った様ね・・・。」

台詞を言い終わると、こつちを向き一気にグラスの中のワインを飲
み干し・・・。あ、むせた。

「き・・・気管に入った・・・。収まるまで待つてて・・・。」

ゲホゲホと咳き込むシリウスさんに呆れ顔。エルナトさんも、呆れ
て声が出ないと言ったジェスチャーをしている。他の皆も、首を振
ったりため息ついたり、とにかく呆れていた。

「そんな・・・哀れむような目で見ないでよ・・・。」

哀れむような目で見たくなります。ギルド長の癖してなんなんだこ
の人。

「変な人ですねこの人」

ルハウトさんの無慈悲こゝかはつくんな一撃。貴方が言つと説得力が全く在りません。

「変な人つて言わないでよ……。まあいいわ。それよりも、皆に集まってもらつたのは……。」

「もらつたのは……?」

「……。」

「……えーつと?」

「……」

「……もしもし?」

「……」

シリウスさんが黙りこくつてから2分経過。何だこの空間。

「タメ長げえよ!早く言えよ!!」

あ、シャムさんが切れた。多分暑いからだろう。シャムさんの毛皮

はすでにびしょ濡れになっていた。

「何よ……。せっかく遊んでたのに……。まあいいわ。ルハウトさん。お願いします。」

あれだけ溜めてそれだけなのか。ついかに遊んでたのか。もうやだ頭痛い。

「了解ー。皆さんは自分がこのギルドに来た理由をご存知でしたね」
「」

ルハウトさんの言葉に、皆が頷く。

「じゃあ話は早いです。ルメリクさん。失踪事件って知ってますか？」
「」

「ええ確か。最近謎の失踪事件が後を絶たないらしいですね。」

「正解です。そこで我がアクアリウム探偵事務所が独自に捜査した所、失踪事件の所では、妙な発光現象が起こってるんです。」

「おい。その発光現象って何なんだ？」

シヤムさんが皆の代表にとして質問する。

「さあ。それは分かりません。これから調査するんです。」

そこまで言い終わった後、シリウスさんがずっと前に出てくる。

「つい訳で、私たちのギルドは、この事件に全面的に協力する事と

しました！」

そうですか良かったですね。って、は？協力？

「おいおい。仕事はどうするんだよ……。」

ワズンさんの一言に、シリウスさんがドヤ顔をしながら答える。

「いい質問ですねワズン君！私は考えました。仕事もしつつ調査するにはどうすれば良いのか！？そこで考えた結果が……。」

「分担する事です」

ルハウトさんが意図的なタイミングで割り込んでくる。何このバトル。

「ぐうつ……。まさか割り込むとは……。」

「アハハッ」まだまだですね」

だから何なんだこの戦い。

「ねえ。そんな事はどうでも良いんだけど。早く分担教えてくれる？」

ぴしゃりと言い放つエルナトさん。さすがとしか言いようが無い。若干イライラしているのは気のせいじゃない。

「分かったわよ。えーと、今回の調査メンバーは……。レグルス君と、ポラリスちゃん。それからルハウトさん。こんな所ね。」

「私・・・ですか？まだ探検隊になったばっかなのに・・・。」

ポラリスちゃんが首を傾げる。

「大丈夫よ。こんな大きな仕事にも慣れないといけないでしょ。それに・・・。」

流し目で僕の方をちらつと見た後、囁くようにポラリスちゃんに何か言ったようだったが、ここからだと言えぬ。

「はいはい解散して。今呼ばれた人は一時間後にここ。それ以外は仕事。いいわね。」

シリウスさんがぱんぱんと手を叩く。早く出て行けのサインだ。僕らはそろそろと部屋から出て行く。もっとも、この部屋から出たいだけだったけど。

僕は、ポラリスちゃんと一緒に道具の準備をしに行く事にした。

・・・

一時間後

「シリウスさんの部屋」

言われたとおりに集まった三人。

「シリウスさん・・・遅いね・・・」

ふつと息を吐きながら、困ったように話しかける。

「確かに・・・遅いですね・・・」

こちらにも困ったような表情。

「気長に待ちましょうよ」

こちらは全く困っていない。

「そうですよ先輩。こんな時もあるんです。」

・・・何故お前がいる、フェイン。

「ああ、もう言いつきやないな。ボクも調査メンバーに加えてくれないですか？」

フェインが何を言い出すのかと思えば、何を言い出すんだよ。

「自分は良いと思います」

「私も・・・良いと思うけど・・・。レグルス君はどうなんですか？」

急に話を振られ、思わず目を逸らしてしまう。逸らした目線の先にあった振り子時計が、午前十時を指していた。

「いや・・・別に良いと思うけど・・・。シリウスさんが・・・。」

なんとか言葉を考え、口にする。

「シリウスさんがどうしたって？」

後ろを振り向くと、埃にまみれたシリウスさんが立っていた。

「ああ、フェイン君の事なら聞いたわよ。でも、残念ながら駄目です。ごめんね。」

「ぶー。しょうがないですね。」

頬を膨らませながら部屋を出て行くフェイン。合掌。

「んで、今日調査に行ってもらう所だけでも、地図には載っていないのよ。」

パンパンと埃を払いながらシリウスさんが言う。いや、埃がこっちに来るんで、はたかないでください。

「地図に載っていない・・・ですか？」

「そう、地図に全く載っていないのよ。おかげで古い地図引つ張りだして来ないといけなくなっちゃった。」

深いため息を付きながら、僕らの地図に丸を付けてくれた。

「白陽^{はくよう}の祠・・・ですよね」

「ええ。よくご存知で。今回の発光現象は、白陽の祠とよばれる場所で起こったの。近場だけど、何が起こるか分からないから注意して。」

「白陽の祠・・・？それって一体・・・。」

「確か・・・。真実の神様を奉つてある祠だったはずですよ。」

真実・・・？何それ美味しいの？

「そう。真実の神レシラムが奉つてあるはず。」

「レシラム・・・？」

「ええ、レシラム。面倒だから帰ってきたら話すわ。」

「じゃあ行きましよう、日が暮れちゃいますから。」

・・・

（白陽の祠）

「来てみたけど……。何も無い様な気がするよ……。」

「そうだね……。この石像に何か秘密があったり……。しないか。」

ぺちぺちと石像を叩いてみるが、全く反応が無い。むしろあったら困る。諦めて帰るか……。

「ねえ皆さん♪あちらから誰か来るようですよ？」

ルハウトさんが指差した先に、一匹のフライゴン。こんな所で一体何を……？

「ちよいちよい♪一体こんな所で何やってんだい♪」

ルハウトさんが聞いても全くの無反応。それどころか……。

「ウウウ……。アアアアア！」

怖っ！目の焦点も定まってないし……。なんか不気味だ。

「アアアアアア．．．コロス．．．コロスコロスアア！」

OK！なんとなくヤバイ事は良く分かる。

「二人とも構えて．．つて．．え．．．？」

「ルハウトさんがあ！ううう．．．。」

岩の傍にもたれかかっているルハウトさん。岩に血がべつとりと付いており、かなり強い衝撃で岩に叩きつけられた事は容易に想像できる。

「ポラリスちゃん！後ろっ！」

「え？う．．そ．．．。」

ポラリスちゃんの後ろに、尻尾を振りかざすフライゴン。

（駄目だ！間に合わない！）

無慈悲に振り下ろされる尻尾。崩れ落ちるポラリス。それから．．．どうしたんだっけ？

・
・
・

く白い空間く

ここは一体……。僕はどうしたんだっけ……？

『汝……。真実を求めたいと願うか……。』

誰だ！何処にいる！？

『汝……。しんじちゅ……。真実を求めたいと願うか……。』

今……。噛んだろ。

『噛んでない。いいから答える。……。真実を求めたいと願うか否か。』

いや……。絶対噛んだろ。

『噛んでないって。良いから答えてくれ。何回も言うのはしんどい。』

なんだコイツ……。答えてほしければ姿を現せ！あと噛んだろ。

『ええっ！？姿現すの！？めんどくさい……。あと噛んではいない！断じて！』

パシユウと言う空気を切り裂く音とともに、一匹の白いポケモンが現れた。いや、ポケモンと言うにはあまりに巨大すぎる。

白き……。獣……。

『我が名はレシラム！しんじちゅ……。真実を求める物の味方となるっ！』

今噛んだろ。レシラム。

第十一探検 白き獣と発光現象（後書き）

ポラリス「ポラリスと！」

作者の！

ポラリス「後書きコーナー！！」

いえ〜い。どんどん、パフパフ〜！

ポラリス「・・・ねえ作者。何これ？」

ん？なにつて後書きコーナーだけど。

ポラリス「いや、それは分かってるんだけど、何で私？他に濃い人たちがいっぱいいるじゃん。」

なんでだろうね。そのうち教えるから。

つー訳で今日はここまで！また今度〜！

ポラリス「短っ！・・・じゃなくて、次回もお楽しみに〜！次回のタイトルは「彼の夢と背負う物」です。それじゃあまたね〜！

第十二探検 彼の夢と背負う物 前編

『嚙んでない！絶対に嚙んでない！』

そう叫ぶ白い獣。こいつ本当に神様なのか・・・？

『神様だ！お願いだからそんな目で見ないでくれ。』

しまいにはうるうると泣き出す始末。どうすればいいんですかこれ。

『分かったよ・・・認めるから。嚙んだ事認めるから・・・それが
我の真実だ。』

よっしゃ勝った。なんか凄く嬉しい。

『うん。つー訳で答えて。汝、真実を求めたいか。それともここで
死ぬ定めを受け入れるか。』

受け入れる訳ないだろ。本当の真実とやらを求めたい。

『良かるう。ならば示せ。本当の真実を求める覚悟を！』

・・・いやいや具体的に言って。覚悟って何？

『いや。知らんよ。なんかそう言えって偉い方から言われた。』

・・・。

『そんな目で見るな。なんか適当に言っとけば力貸すから。ほら早

く。主人公っぽく頼む。』

適當って……。それで良いのか神様。

『いいの。どうせ暇だし。』

分かった。じゃあ……。

「僕はここで死ぬ真実を受け入れたくない。本当の真実があるとすれば、その真実を見つけない。だから、力を貸してくれ。レシラム！」

言っちゃった……。滅茶苦茶恥ずかしい。何この公開処刑。

『良いだろう。しかし、危険も伴う。それでも良いと言うのか？』

ああ、構わない。どんな残酷な事があっても乗り越えてみせる。

『分かった。』

じゃあ……。力を貸してくれるのか。

『ああ、構わぬ。力を貸してやろう。とりあえずこれを受け取ってくれ。我が下界に出る時に必要な物だ。』

音も無く落ちてきた棒の様な物。良く見ると杖のような形をしている。

『それは白陽の杖。先端に青い宝石が埋め込まれているだろう。』

先端部分には、確かに青い宝石が埋め込まれていた。透き通った海の色をしていて、触ると、僅かに熱を持っているようだ。

『それを翳^{かざ}せば、我が力を貸そう。間違っても面白半分に使うなよ。面倒だから。』

ああ、そう……。

『ちなみに、その杖は素質の在る者にしか触れない。』

素質……。

『ああ、すでに神を宿していたりする者の事だ。ちなみに、素質の無い者が触ると……。』

触ると……？

『結構ビリビリする。そんだけ。』

そ、そうなんだ……。

『さて、そろそろ元の世界に戻してやろう。彼女たちを救うのだろ
う？』

ああ。もちろんだ。

『ふむ。元の世界に戻る前に、我を召還する時の決まり文句を教え
ておこう。』

決まり文句……？

『ああ。そうだ。いいか……。まず……。』

約数分後

なんか……。凄いな……。

『む。そうか。前に宿していた者はノリノリだったが？』

そ、そう。凄くどうでも良いな。

『さて、今度こそ戻してやろう。』

体中が光に包まれ、レシラムの姿が見えなくなる。そんな中、ふいに声が聞こえた。

『——忘れるな。真実は時に残酷だと言う事を。』

『——そして、時に人を殺すという事も。』

・
・
・

白陽の祠に戻った僕を待ち受けていたのは、数分前と同じ光景だった。岩に打ち付けられ、気を失っているだろうルハウトさん。僕の足元に横たわっているポラリス。

そして、何処かの虚空を見つめているフライゴン。何もかも同じだった。僕の手にある、一振りの杖を除いては。

「フライゴン……。」

不思議と怒りを感じなかった。度重なるなにかに麻痺しているのだろうか。訳が分からない事だらけだが、とにかくやるしかない。

「アアア……。ウアアア……。」

僕の声に反応するように、ゆっくりとこちらを向くフライゴン。目の焦点が定まっていなく、虚ろな目をしていた。僕はゆっくりと杖を掲げる。そして、あの言葉を呟く。

「汝の名前はレシラム。真実の女神なり。我の名前はレゲルス。真実を追い求めし者なり。」

そこまで言い、静かに杖の先端の青い宝石に力を込める。

「小さな王の名において命ず。我に従い、具現せよ！」
レゲルス

「——行くぞ！レシラム！」

杖の先から、巨大な炎が放出され、あたりが業火に包まれる。僕の目の前でやけに大きい火柱が上がり、炎が僕に纏わり付いてくるのを感じた。

『行くぞ！小さき王よ！女神レシラムの名において、汝に力を貸してやるっぞ！』

体中に力がみなぎってくる。今なら戦える気がする！

『私の力について説明しておこう。我を宿すと、回避能力がかなり上がる。例で言えば、瞬発力、判断力、洞察力、それから集中力。僅かだが攻撃力も上がる。だが、防御力がかなり落ちる。』

「つまり、攻撃は全部避けろって事？」

『ああ、そう言う事となるな。しかし安心しろ。自分でも驚くぐらい回避できるから。』

OK！そこまで分かれば良い。来い！フライゴン！

・・・

ルメリク side

くシリウスの部屋く

「冗談じゃ・・・ないわよね。」

「はい。僕だつていまだに信じられませんが。」

本当に信じられない。いや、信じたくない。自分の宿命が決まっている事なんて、信じられるはずが無かった。

「ねえ・・・。ただの夢だったんじゃないの？そんな事ありえるはずが無いでしょ。」

ごもつともだ。何も証拠が無ければ夢だったで終わるだろう。でも、

「証拠があるんです。これ、見てください。」

鞆の中を探る。ひんやりとした無機質な感触があつたので、それを取り出した。

「それ・・・。パズルのピース・・・？」

「はい。世界のピースと言っていました。」

ルメリクが手に持っている物。何処からどう見てもパズルのピースだった。百人中百人がパズルのピースと言っだろう。

「世界のピース・・・？見た事が無いんだけど・・・。」

訝しげにピースを見つめるシリウス。

「それを集めろって言われました。場所は、そのピースが導いてくれるとも。」

「これを集めてどうするつもり？」

「分かりません。それを集めろとは言われましたが。」

「そう……。一応色々なギルドに聞いておく。何か分かるかも知れないから。」

「有難うございます。僕の用件はそれだけです。」

そう言って出て行こうとすると、シリウスに引きとめられた。

「待つて。最初に言った事、考え直す気は無い？」

「分かりません。でも、恐らく無理でしょう。僕だって皆に迷惑を掛けたくないですから。」

「今すぐでは無いでしょ？」

「ええ、でも、おそらくもうすぐです。」

ドアを閉める。閉められたドアを見つめながら、シリウスが呟く。

「何も、探検隊辞めなくてもいいのにね・・・。」

第十二探検 彼の夢と背負う物 前編（後書き）

ポラリス「ポラリスと！」

作者の！

ポラリス「後書きコーナー！！」

いえ〜い。どんどん、パフパフ〜！

ポラリス「はいと言うわけで第二回！後書きコーナーですよ！」

今回の話題はこちら！名前の設定についてですね〜。

ポラリス「今回はみんなの名前の由来について説明するよ。」

主要な登場人物の名前は全部、星の名前から取っております。シリウスさんが出た時に知った人も多いでしょうね。

ポラリス「私の名前の由来も、星の名前なんだよ！確か北極星の名前だったね。」

うん。そうだよ。たまたま星の名前があったから、そうしたの。

ポラリス「でも、省略してある人もいたよね？」

うん。ルハウトとか、ルメリクとかかな。

ポラリス「ルハウトさんは確か、フォーマルハウトから名前をつけ

「たんだつたよね？」

「確かそうだよ。」

第十三探検 彼の夢と背負う物 後編（前書き）

ちなみに、チキン南蛮とは、鶏肉を甘酢に漬けた物です。

第十三探検 彼の夢と背負う物 後編

先手を打ったのはフライゴン。頭上で黒ずんだエネルギーの塊を作り出し、そのままレグルスへ。弾速がかなり早く、一瞬にしてレグルスを焼き焦がした様にも見えた。

「見切った！」

数ミリだけ体をずらし、フライゴンの攻撃を避ける。まるでそこに来る事を予想していたかのように。

「さあ、どうしたんだ？お前の攻撃など遅すぎるぞ？」

レグルスが放った挑発は効果こうか観面くわめんだった様で、フライゴンは続けて2、3発のエネルギーを撃ち出す。

（右、そして次は左か。そして最後に右。そういえば、今日の晩御飯ってなんだったつけ？）

悠長にそんな事を思いながら、放たれるエネルギー波をひらりと避ける。おそらく、彼にとっては造作も無い事なのだろう。

（あつ、そういえば今日ってリクエストの日だったつけ。シャムさんにチキン南蛮頼んでおこつと。）

フライゴンは、様々な色が入り乱れた光線を放っている。先ほどのエネルギー波は使ってこない。

（PP切れか？さつきから色々な技を使ってくる。エネルギー波の

色は・・・赤と紫と緑色。緑色のは、若干溜めている事からソーラービームで確定。

紫色のは恐らく竜の波動。赤色のは、熱を若干感じた事から火炎放射だろうな。）

一瞬のうちに考え、また回避行動に移る。近くにあった岩を乗り継ぎながら、まるでそこに技が来る事を、あらかじめ知っているかのように避けていく。

やがて、ソーラービームと思われる光線も使われなくなった。光線が当たった先にある、大きな岩がドロドロに溶けていたのは見なかった事にしよう。

（あれ？チキン南蛮の南蛮ってどんな意味だっけ？酢漬けにするかだったかな・・・。あ、しまった。）

彼が気がついた時には、フライゴンの大きな口が目の前に。

（噛まれたら痛いだろうなあ・・・。じゃあ、えい！）

フライゴンの口の中に、ゴルフボール大の火球を投げ込む。噛み付きを避けた瞬間、フライゴンの口の中で小規模の爆発が起きた。

（よしっ！怯んだ！）

心の中でガッツポーズを決めながら、フライゴンのどてっ腹に後ろ回り蹴りを叩き込む。不意を突いた攻撃に、なすすべも無く吹っ飛ばすフライゴン。

『おい。小さき王よ。そろそろ止めに入らないと時間が無いぞ。』

レシラムの忠告が頭に響く。

（時間？どう言う事？）

『ああ、後で説明する。それより、さっさと決めてしまえ。』

（へいへい。分かってます。）

杖に手を翳^{かざ}し、先端の宝石部分に炎を集める。全体が一瞬にして炎に包まれ、杖と言うよりは棍^{メイス}に近い物が出来上がった。

『杖は・・・殴る物じゃないはずなのだがな・・・。』

レシラムの冷静なツツコミを聞かなかった事にしつつ、攻撃を避けながらフライゴンへと近づく。光線の量が減っている為か、かなり容易に近づく事が出来た。

「てい！とお！そいやっ！」

メイスによるコンボが華麗に炸裂した後、さらに距離を詰め・・・。

「――
フレイムワルツ
炎と踊れっ！」

右打撃、左フック、アッパー、振り下ろし、回し蹴り、の後、止めに全力でメイスを振りかざす。

「これで、止めだあ！」

全身全霊の力を込め、炎と同化したメイスを叩きつける。ゴガツと言つ鈍い音を響かせながら、フライゴンは地面に突っ伏した。

『っ！！離れるレグルス！』

（な、何・・・？）

疑問に答えてはもらえず、レシラムはとにかく離れろと言う。とりあえず離れておくべきだろう。

（この辺で良いの・・・？）

フライゴンから数メートルほど離れた岩場に座り込む。と、次の瞬間。

「黒い・・・穴・・・？」

フライゴンの近くに開いたどす黒い穴は、そのままフライゴンを引きずりこんで行く。

（引きずり込まれちゃった・・・。レシラム、あれって何か分かる？）

『ああ、おそらくあれは・・・。』

（知ってるの・・・？）

『ああ。まあ、その話はまた今度だ。それより、お前に一つ言っておかなければならない事がある。』

（杖は殴る物じゃないと。）

『・・・それもあるが、フライゴンの事だ。我の感覚だと、あのフライゴンはもう死んでいる。お前と戦う前からな。』

（え！？でも確かに動いてたよ？）

『失踪者名簿のなかに、フライゴンはいたか？』

（えっと・・・）

前にルハウトさんに教えてもらったけど・・・。確か一匹いた様な気がする。

（いたよ。この辺りで失踪したはず。）

『そうかやはり・・・。おそらく、何者かに誘拐され、殺されたのだろう。その後、何らかの方法で蘇らせられたとしか考えられない。』

（蘇生？んな事出来るの・・・？）

『さあな。そこまでは我も知らぬ。っと、それより仲間は良いのか？』

正直忘れていた。僕は近くにいたポラリスちゃんを抱きかかえ、心臓の鼓動を聞いた。

「大丈夫。生きてる。」

『む。眼を覚ましたぞ。』

パツチリと眼を開けるポラリスちゃん。特に目立った外傷は無く、
気絶していただけだろう。

「れ、レグルス君。恥ずかしいから降ろして・・・／＼／」

頬を赤らめながら、大地をしっかりと踏みしめるポラリスちゃん。
大丈夫そうだ。

「ねえ。その杖って何・・・？」

あ、そつか。気絶してたんだっけ。僕はこれまでに起こった事を手
短に話した。

「ふーん。でさ、その杖から・・・レシラムだっけ。出せるの？」

「やった事は無いけど・・・。出来るの？」

『出来るぞ。杖の先から我が出てくるようにイメージしろ。』

「えっと・・・。こう？」

先端の青い宝石が鋭く光り、目の前にレシラムが現れた。

『あ、どうも。神です。』

「あ、どうも。ポラリスって言います。」

セールストークのような会話を繰り返しながら、次に両者が放った
言葉は一緒だった。

「『か、可愛い……。』」

「そ、その白い毛皮。気品あふれる態度。そしてその青い眼。めちやくちゃ可愛い！」

『いやいや。その茶色いハリのある毛皮。おっとりとした栗色の瞳。おぬしの方が我より何倍も可愛いぞ！』

……。えーと。なんか、意気投合しちゃった。とりあえず、そっとしておこう。

二人のトークを背中で受けつつ、そそくさとルハウトさんの方へ行った。

「うわ……。これは……。酷い……。」

岩にもたれているルハウトさんの背中には、大きな傷が入っていた。

「確かに酷いですね。先輩。」

背中から間延びした声。後ろを振り向くと

「だからなんでお前がいる。フェイン。」

黄色い電気ネズミが一匹。

「来ちゃった。えへっ」

「来ちゃったじゃねーよ。仕事はどうした。」

「もう終わらせましたよ。今さっきギルドに帰ってきた所です。ついでに訳を聞いて下さい。今から治療しますから。」

泣く僕をむりやり押しのけ、フェインがルハウトさんに手を乗せる。

「・・・あれえ？ここって一体・・・」

一瞬にして目が覚めたルハウトさん。フェインよ、一体何をした。

「何って・・・体内構成を若干弄っただけです。体内の活動してる部分に微弱の電磁波を流し込んで、そこを仮器官として活動させるだけです。」

「わかんねーよ。全っ然！」

分かる人が居たら教えてください。できれば優しく。

「はいはい。馬鹿な先輩に後で教えてあげますから、とりあえず帰りましょう。あっちでガールストークしてるのを連れてきて下さい。」

嗚呼。先輩としての立場は何処へ・・・。

・・・

ギルド寄宿舎

「あーもう。ちょっと付いてっただけなのに、なんでこんなに怒られるんですか？」

フェインが、自分のベッドに潜り込みつつ愚痴る。

「急に居なくなったらびっくりするでしょうが。仕方ないんじゃない。」

ルメリクの指摘に首をすくめる。

「あ、まあ確かに。」

珍しく納得しやがった。ごもつともだろう。

『おいレグルス。少し良いか。』

急に、頭の中にレシラムの声が響く。

（急に話しかけるな。びっくりするだろ。）

『何回も話しかけたが？』

（え。本当？ごめん。）

『構わぬ。それより、杖を持って外へ出てくれ。』

二人に断りギルドの外へと出る。今日はどうやら曇天のようだ。

・・・

ギルド近くの道端

「んで、こんなとこまで呼び出して、何の用事？」

さつきみたいに杖を翳^{かさ}し、レシラムを出す。

『ふむ。貴様みたいに神を宿す者の名を覚えておこうと思ってな。貴様のように、神を宿す者は「背負う者」と呼ばれている。』

「背負う・・・者・・・？って、ちょっと待て。僕以外にも神を宿しているその・・・背負う者だっけ。っているの？」

僕の質問に、あくび交じりで答える。

『ああ、居るぞ。既にこの近くにも一人いるな。』

「近くに居るの！？誰かって分かる？」

『残念だが、全く分かん。それに、知っても良い事は無いかも知れんぞ。』

「何でさ。近くに居るなら知っておいたほうがいいじゃん。」

僕が言うと、またもやあくび交じりにこう答えられた。

『神背負い同士が戦い、勝った者は、負けた者の神も背負う事が出来る。負けた方は奪われると言う事だな。』

「奪う・・・？何のために？」

『神には強大な力が備わっている。当然だが、増えることにさらに大きくなって行く。そして最後は』

そこまで言つと、少し溜めながらこう言つた。

『——世界をも支配する事が出来る。』

「せか・・・い・・・？」

あまりの壮大さ（と意味不明さ）に訳が分からない。あっけに取られていて、

『ふむ。人は皆同じ反応をするな。そんなに不思議か？』

レシラムが顔を近づけ、こちらの顔を覗き込む。顔近いですって。

「いや、むしろ驚かない方が不思議って言うか……。あと、顔近い。」

言われて傷ついたのだろうか？少し離れて口を開く。

『もしお前が、神背負いと接触したいのなら好きにしろ。ただし、ぼっこぼこにされても文句は言えんぞ？』

そう言い残して、杖の中へと戻っていくレシラム。なんか腹立つけど、ここまで言われてしまうとどうしようもなく。

「帰るか……。」

呟いた声を聞いた者は居ない。

ギルド寄宿舎

「あ、お帰りレグルス。」

部屋に帰った僕を包んだ声は、ルメリクだけだった。もう一つのベツドの上には、可愛い寝息を立てるフェインがいた。寝顔だけ

なら可愛いのだがなあ・・・。

「ちょっと・・・。眠れなくってさ。」

少し悲しい表情をしているルメリク。何かあったのだろうか？

「どしたの。何か悲しそうな顔してない？」

「うん。ちょっと・・・ね。」

「そっか。」

そっけない会話を残して、自分のベッドに入ろうとすると、ふとルメリクが。

「ねえレグルス。もし、もしもだよ。僕が居なくなったら、悲しんでくれる？」

「急にどしたの。ルメリクらしくも無い。」

「うん。やっぱいいや。ちょっと外の空気吸ってくるから。」

それだけ言い残して出て行った。彼に・・・何かあったのだろうか。

（考えても分かんないよね。今日は疲れたしもう寝よう。それにしても・・・。）

——悲しんでくれる？

彼の言葉が本当の事となるのは、
もう少し先の事。

第十三探検 彼の夢と背負う物 後編（後書き）

ポラリス「ポラリスと！」

作者の！

ポラリス「後書きコーナー！！」

いえ〜い。どんどん、パフパフ〜！

ポラリス「はいどうも。第三回後書きコーナーの時間だよ！」

今回はこちら。あ、そのメッセージボード取って。

ポラリス「あ、これ？はい、どうぞ。」

ん。ありがと。今回はレグルス（神背負い）の力について説明します。まずはこちら。

攻撃力

防御力

素早さ

判断力

これがステータスですね。見るからに防御が弱いです。

ポラリス「でも、素早さが凄い大きいね。」

うん。ここに回避能力が現れているんだよ。それに、なかなか高水準じゃないかな。

ポラリス「まあ、確かに。攻撃力も割りとあるし。」

ちなみに、この回避能力に作者が名前を付けるとしたら、イリアクション瞬間見切。見たいな感じかな。

ポラリス「うっわー。中二臭い。」

うるさい。二分ぐらいで案がでたんだよ。ほっとけ。

ポラリス「はいはい。次回もお楽しみに〜!」

番外編 悪の大魔王大作戦！ 前編（前書き）

ごめん。やってみたかったただけなんだ。うん。

はい。ストーリーとは全く関係ないんです。

番外編 悪の大魔王大作戦！ 前編

夜。どっから見ても夜。月明かりに照らされた室内で、一匹のポケモンが悩んでいた。酔っ払いギルド長のシリウスである。手には、淡いライトブルーの封筒がしっかりと握りつぶされていた。

「見．．．ないといけないよね．．．でも．．．見たくないよ。」

恐怖に震える手。怖い怖い怖い。でも見ないといけない。この二つが重なり、少女は何かを悟った。

「見ちゃえ。」

バリバリと封筒を開け、中身の紙をひとしきり眺めた後．．．

「うわああああ！見なきゃ良かったあああ！」

叫んだ。ただひたすらに。その声を聞きつけたのか、一匹のゼニガメが部屋に入ってくる。

「ちょ！どうしたんすかシリウスさん！？」

「ル．．ルメリク君．．．良いところに來たわね．．．これ読んで．．．」

この世の終わりと云った表情で、ルメリクと呼ばれたゼニガメに、手紙を渡すシリウス。顔色が悪いのはお酒の飲みすぎでは無いだろう。

「・・・何があつたんですか。」

ジトツとした目線を投げかけるルメリク。がどうやら効果は無かつたようで・・・。

「えーと何々・・・。」

仕方なくと言つたように、手紙に目を落とす。

拝啓シリウス様

本日は割りとお日柄も良く・・・。なんてね！四ヶ月前に会つたばつただけど、とりあえずお久しぶりかな？ミルザムちゃんです。うん、今日は相談があつて手紙を出しました。あなたの事だし、くしゃくしゃに丸めてポイしてるんじゃないかと心配になりながら、この手紙を出してまーす♪

さて、本題に入るうか。あなたもギルドやってるから知つてると思うけど、もうそろそろ卒業試験の

シーズンだよ。私のギルドからも二匹程卒業試験に出るんだけどさ、人手が足りないのよ。だからさ、

手伝つてくれないかなって。いや、仕事の依頼だから報酬は出すよ。とりあえず一万ポケと、あなたが

欲しがっていた焼酎。確か・・・「芋焼酎 塩昆布」だったかな？

ま、あさつてまでにお返事だしてね。
はいばーい。

あなたのミルザムちゃんより

「つて書いてあるよ・・・。」

ミミズが張った様な字を必死に解読しながら、ルメリクが伝えると、
先ほどの顔が見る見るうちに明るくなった。

「そ、それホント！？良く見せて！」

手紙を強引にひつたくと、一行目からまた読み始めるシリウス。
お顔はさつきと比べて晴れ模様。

「ルメリク君、ありがとう。」

につこり笑顔を見せた後、急に冷静な顔をルメリクに向ける。

「ルメリク君。悪いけど・・・今回、君の出番これで終わりだから。」

「・・・本当？」

「うん。本当。」

二人の間で、冷たい風が巻き起こる。今夜は寒くなりそうだ。

・・・

後日 シリウスの部屋にて

「はい！つー訳であんたたちに集まってもらったから。」

シリウスの声が響く。その隣には、一匹のペルシアン。

「今回はヨロシク〜♪」

前足を振りながら、明快な声を高らかに。どうやら名前はミルザムと言っらしい。

「いや・・・具体的に何をしろと・・・？」

ミルザムのインパクトに、若干押され気味のワズン。いつものキャ

ラは何処へ行つたのだろうか。

「はいはい。具体的に言つとね、《悪の大魔王作戦》を手伝って欲しいの。」

「『『『『悪の大魔王？』』』』」

ポラリス、フェイン、ワズン、エルナト、シャムの声が重なる。どうやら誰も知らないようだ。

「あれま。誰も知らないの？」

首を傾げるミルザム。まるで一般常識の様に言っているが、多分この辺りのポケモンは知らない。

「あのね……。あんたらのギルドとは支部が違つてしょ。だから知らなくて当然。」

あっさりと吐き捨てるシリウス。説明するのも面倒、と言つた表情だったのを察知したのか、ミルザムもしっかり黙ってくれた。

「んで、悪の大魔王作戦の何を手伝えば良いの？」

ピンク色の尻尾を傾げながら、エルナトが尋ねる。

「んにや。単刀直入に言つと、裏方を手伝つてほしいの。道具用意したりとかさ。」

肉球でシリウスの膝を突つつきながら、ミルザムが答える。

「ま、裏方じゃないのもあるけど。この紙に役割が書いてあるから、きちんと読んどいて。」

シリウスがそう言うのと、話を聞かされていた五匹はいっせいに紙に詰め寄る。

「んーと。あ、僕が大魔王役ですか。人気者はつらいですねえ。」

とフェイン。

「・・・何だこれ。吹き替え係？」

シャムが尋ねると、シリウスが教えてくれた。

「ああ、それはね。大魔王がフェインの声じゃ怖くないでしょ。だから、グロい声の奴に頼みたかったの。」

「ぐ・・・グロ・・・。」

若干の悪意を持った発言を受け、精神的にダメージを負った様子。そんなシャムを見て、フェインがにたにた笑っている。

「はははっ！グロいですってー。」

調子に乗ったフェインを叩き落す様に、シリウスが再び口を開く。

「あ、フェイン君が選ばれた理由は、悪役面してるからよ。」

「あ・・・そ、そ・・・うです・・・か・・・。」

隅っこで捻くれている二匹を尻目に、ポラリスが声を上げる。

「私・・・依頼主・・・？」

メモには確かに依頼主と書かれていた。その反応を見てか見ずしてか、ミルザムが話す。

「架空の依頼で外に連れ出すのよ。そして突き落とす。」

物騒なワードに敏感に反応するポラリス。

「つ、突き落とす！？ちょ・・・え？」

「うん。落とし穴に突き落とすの。」

おいおいと言った感じで、肩をすくめるポラリス。そしてお次は・・・。

「俺の通行人役って何だ？」

「私の演出係もよ。」

エルナトの上に帽子の様に乗っかりながら、大きなはてなマークを一つ。あ、二つか。

「ワズンは、探検隊に悪の大魔王の噂を広めるの。エルナトは、大魔王登場の演出と、トラップの作成よ。他に質問は？」

「いや・・・無いかな・・・。」

どうやら皆同じで、全く質問が無いらしい。それもそれで問題ありだが。

「実行は一週間後よ。それじゃあ皆、解散!」

シリウスの声が響く。

流れ行く空を見上げながら、一匹のヒトカゲが呟く。

「何だろう。この仲間はずれにされてる感は・・・?」

呟いた声を聞くものは誰もいない。

番外編 悪の大魔王大作戦！ 前編（後書き）

はい！どもども曾我氏です。前編はいかがだったでしょうか？正直つまらなかつた人は素直に挙手して下さい。

・・・けっこういいいますね。ま、いいや。

今回の話「悪の大魔王大作戦」は、続き物となっております。次の章が終わった後に後編を載つけたいと思いますのでヨロシク。

さつき挙手した人は後で屋上に来てください。

第十四探検

c r u e l

d e s t i n y

それはとても残酷に

(前書き

残酷描写ありありです。

後半部分に気を付けて下さい。

第十四探検 c r u e l d e s t i n y それはとても残酷に、

エルナトside

エルナトの部屋

「久しぶり、姉さん。ようやく二人つきりになれたね。」

私のお気に入り椅子に腰掛け、静かに笑みをたたえるブイゼルのハウト。何を隠そう、彼は私の義理の弟。

「姉さんなんて言わないでよ。あんたの方が年上でしょ？」

皮肉めいた笑顔を残す私。実際、私は24歳、彼は26歳。背丈は私の方が少しだけ高い。

「まーまー。ほら…昔からの癖みたいな物さ。「あの時」までずっとこんな感じだったでしょ。」

いつもの悪戯っぽい笑みを振りかざす、私の弟。姿と声以外はあまり変わっていない。

「あの時…ね。もうその事は忘れようって誓ったはずだけど。それよりも、まだ続けてるの？」

「ん？何を？」

「——復讐よ。」

私が言った途端に、空気が凍りついた。そっか。やっぱり・・・やっぱり彼は・・・。

「... ああ。もうそろそろ実行段階だよ。でも安心して。姉さんと可愛い弟は絶対に巻き込まないから。」

「ねえ。もう... 止めましょう。父や私たちを見捨てた奴らに復讐して、それで何になるの？」

「止めないよ。何にもなんないのは分かってるけど。」

ああ、やっぱり無駄。分かってたよ最初から。貴方はもう... 何をしても止められない。

「最後に... 一つだけ聞かせて欲しいの。」

部屋から出て行くこととする、弟の動きが止まる。

「私の... 私の可愛い弟は^{ルハウト}何処に行ったの？」

「.....。貴方の可愛い^{ルハウト}はもう居ない。ここに居るのは、ただの哀れな復讐鬼さ。」

「..... そっか。じゃあね、私の可愛かった弟。」

「ああ... じゃあね。僕の愛しいお姉さん。」

血の繋がっていない姉弟の、小さな糸がプツリと音を立てて切れた。頬を撫でた風が酷く冷たかったのは、私の頬を伝う涙の所為。その

風は、皮肉なほどに澄んだ風だった。

...

ルメリク side

うん。状況を整理しよう。いや・ね。なんかさ、体が動かないんだよね。これってあれ？俗に言う金縛りって奴か？・・・いやいや。やめよ。やめてってば。そういうの苦手なんだよね。お化けとか怪奇現象とか絶対無理だしさ。確かに寝たはずだよ、うん。大して疲れてるわけでもないし。

と、いたって尋常な考えをしていた僕は、次の声で何とか精神を落ち着かせる事が出来た。

「ううらめしくくない」

恨めしく無いのかよ！心の中で一人突っ込みを入れ、何とか精神を元の状態に…。ん？あれ、この声どこかで…。

「おっはーようーごーざーいーまーすーあーさーでーすーよー」

ああ、間違いない。あの人の声だ。

レグルス side

なあ、おい。何やってんだお前ら。え？見て分かるって。…分かる訳ねーだろ！何が悲しくてルメリクの上にルハウトさんが乗ってたんの！？

色々な意味で絶望的な現場を目の当たりにした僕。なんか……もう……限界なんだけど。

「お、レグルスさん♪今モーニングコールをしてたんですよ♪」

知ってましたかルハウトさん。モーニングコールってそんな物じゃないんですよ。

・・・

シリウスの部屋

「あの…さ。あんたらの部屋で何があった訳？」

ルメリクに蹴つ飛ばされているルハウトさんを見ながら、至って面倒臭そうにため息を付く親方。気持ちは痛いほど分かります。

「何でもないです。何でもなかった事にして下さい。」

壁に寄りかかり、いつもより若干ローテンションなフェインが喋る。本人曰く、あの光景を見た瞬間に何かを悟ったらしい。真偽の程は確かめないでおこう。

「レゲルスくん。一体何があったの？」

純粋なポラリスちゃんが聞いてくる。本当の事を教えても良いが、あまり思い出たくないので適当にはぐらかす事にしよう。

「ポラリスちゃん。林檎はどうして赤いのか知ってるかい？」

フェインがはぐらかす。よし、ナイスだ。

「え！？な、何で急に……？」

「よし分かった。教えてあげるからこっちに来て。」

ポラリスを引き寄せると、今のうちに、とでも言いたそうな表情をこちらに向けて来た。今日は良く働くな。

「……。レゲルス君、地図出して。」

怒る…と言うよりはもう諦めているような表情でこちらを見つめ

ているシリウスさん。これ以上シリウスさんの胃を傷つけないように僕は、静かに地図を出す。

「今回の発光現象は、地図の右上の．．．いや、その右の．．．そうそこ。銀水晶の峡谷って言うんだけど、とあるギルドから調査の依頼が出てるの。行ってくれる．．．よね？」

「構いませんけど．．．。今回は僕らだけですか？」

僕ら、と言うのは当然だがナガレボシの面々の事。銀水晶の峡谷がどれ程危険なのかは分からない。だからこそ、正直自分たちだけでは心もとないのは確かだ。リーダーである以上、皆を危険に晒したくは無いしね。

「ううん。君たちだけでも大丈夫だとは思いつけど、一応頼んどいた。依頼されたギルドから探検隊が出るってさ。」

それを聞いて、少しだけ安心した。ほっと胸を撫で下ろす僕と対照的に、シリウスさんは少し難しい顔をしている。

「……あの探検隊で大丈夫かしら。」

呟くように言った言葉を、僕は見逃さなかった。

「あの探検隊？何か不都合でも在るんですか？」

聞こえてたのか、と言った表情をするシリウスさん。

「…実はね、少し問題があるのよ。探検隊として重大な欠陥がね。」

シリウスさんの話を聞いてみると、どうやらその……非常に猪突猛進らしい。意味が分からない人は、ぜひ辞書で調べてみよう。

「自分を客観視できない探検隊は、大体が死んでいくの。自分の疲労具合や仲間の具合、ペースなどを考えられないからね。君らの場合は…そうね、皆が客観視出来てる。良いチームよ。」

良いチームと言われ、少し嬉しい。それはともかく、何でそんなチームが今まで生き残れているのか不思議で仕方ない。シリウスさんの話を聞いている限り、とても生き残れそうには無いんだけど。

「彼らは、一言で表すと強い。個々の戦闘能力が高いのよ。だから割と平気な訳。」

「じ、じゃあ、彼らが行けば良いですね。僕たちが行っても足手まといにしかないんじゃないじゃ…。」

「ならないわよ。君たちだってまあまあ強いし。彼らより少し下ぐらいかしら。」

ああ、それを聞いて少し安心した。

「さ、もう行きなさい。良い知らせを待ってるわ。」

がんばります。僕一匹だけの声が響いた。

「じゃあ、これは知ってるかな？朝顔は大体何時に花を開くでしょうか？」

「え！？うん・・・5時ぐらい・・・かな？」

「ブブー。朝の3時半から4時ぐらいだよ。」

まだやってたのかあんた等。つか、話題変わってない？

・・・

二日かけてやっとたどり着いた。地図で見ていると、どうやらこの辺が銀水晶の峡谷みたいだ。地面から銀色の鉱石が突き出していて、割と刺々しい。

「シリウスさんの情報によると、これが銀水晶らしいですね。持つて帰ったらどれ位の価格になるんでしょうか？」

ぺちぺちと銀水晶を叩きながら、なにやらよからぬ算段を企てているフェイン。あれ、でも確か銀水晶って……。

「ここら一体は天然記念物だったはず。勝手に持って帰ったら怒られるよ。」

ポラリスちゃんの言葉に、がっくりと肩を落としたフェイン。

「つーか、こんな大きな水晶をどうやって持って帰る気だったの？」

ルメリクの連撃に、ますますがつくりするフェイン。どうやら諦めが付いたようで、水晶に昇っては滑り降りてを繰り返している。…楽しそうだなそれ。

と、こんな具合に雑談していると、前に聞いた（といっても、もう二日前の事だが）探検隊がやってきた。

左から見て、アブソル、パチリス、ストライク。三匹の探検隊のようだ。

「俺らはイデオ。シルバーランクに最近なつたばかりだ。あんたらがナガレボシだな。」

リーダーと思わしきストライクが喋る。

「ああ、そうだよ。僕らがナガレボシ。」

リーダーと思わしきゼニガメが…。ってあれ。リーダーって僕だよ

ね？

「そうか、短い間だがよろしくな。よし、まず自己紹介からだ。俺はミザール。この探検隊のリーダーを勤めさせてもらってる。そちらのリーダーは誰だ？」

．．．あ、僕のことか。

「あ、僕です。レグルスって言います。よろしくお願いします。」

「そうか。リーダー同士宜しくな。」

そう言つて手を差し出してくるミザール。さすがにまだ手を切断したく無いので、そつと遠慮しておいた。

「ん」と。あ、次は自分だね。デイルって言います。宜しくどうも。

「

アブソルが前に出て、にこやかな笑みを交わす。アブソルって言えばクールなイメージしかなかったけど、この人はどうやら違うみたいだ。

「僕はルメリクって言います。宜しく。」

ぺこりとお辞儀をして、ルメリクが自己紹介を終える。

「じゃあ次はボクです。フェインって言います。宜しくお願いしますね。」

フェインが自己紹介を終えたところで、さっきから一言も話してい

ないパチリスが、急に口を開いた。

「フェインと言ったか。貴方とは一度手合わせをして見たい。」

それだけ言つて、一步後ろへ下がるパチリス。

「あの〜。ボクって嫌われてます?」

若干苦笑いを浮かべながら、フェインが喋る。と、それを慰めるようにデイルが一言。

「大丈夫だよ。このパチリス——アルは、認めた者しか話さない。実際、自分もあんまり話した事ないし。話してくれるって事は認められてる証拠だよ。」

それを聞いて安心したのかどうかは分からないが、フェインも黙った。さて、例外（口を開いてくれない）を除いて、紹介をしていないのは後一人。みんなの視線がポラリスちゃんに集まった。

「あ、私ですね。ポラリスって言います。皆宜しくお願いします。」

「宜しく。」

「宜しくね〜。」

「……………」

誰が誰の台詞か考えてみよう！

・
・
・

銀水晶の峡谷

「きりさく！」

デイルの頭の刃が鋭く光り、数匹のダンバルを一刀両断。個々の能力が高いと言うのは嘘ではなくて、どうやら本当らしい。

「10万ボルトっ！」

こちらもちちら。体に溜めた電気を一気に放出して、ドクケイルやテッカニンといった虫ポケモンを蹴散らしている。非力なパチリスからは想像できないほどのパワーだ。

「……よし。終わった。皆無事の様だな。」

ミザールの言葉に皆が頷く。と同時にフェインがある提案をした。

「あ、あの、少し休憩しません？ここまで歩き通しだったし、皆疲れてるでしょ。」

苦笑いを浮かべながら、自分の足をパンパンと叩くフェイン。

「僕らは別に・・・構わないけど。」

否、正直な話をする、早く休みたいのが事実だ。ここまで大体4時間程歩きっぱなしだったし。ミザールの方を見ると、悩むような顔ぶりをしていた。

「悪いが俺は先に進ませてもらおう。お前たちはどうする?」

「ごめんねフェイン君。悪いけど僕も先に進みたいんだ。」

「……リーダーの命令なら。」

どうやら、イデオの三匹は先に進みたいらしい。その言葉に、少しだけ悲しそうな素振りを見せながらもフェインが喋る。

「そうですか。ボク達も少ししたら後を追いかけるので、お先に行ってください。」

いつもより若干無機質な顔。いつもとやはり何処か違っていているフェイン。その姿を見て、何故か少し嫌な予感がしていた。

「ああ、分かった。お前らも無理をしないようにな。」

そう言い残し、ダンジョンの奥へと去っていくイデオの三匹。その姿を見て、僕たちは立ち尽くす事しか出来なかった。

・・・

「先輩・・・起きてください。時間です。」

深い深い闇から目を覚まし、目を開けた時に飛び込んできたのはフエインの顔。・・・何で寝てたんだっけ？

「何でって……体力の温存のために皆で寝てたんですよ。ボクを見張り役にして。」

……あ！そうだった。じゃんけんでフエインが負けたんだっけな。

「ほら。寝ぼけてないで立ってください。もう出発しますよ。」

僕は、フエインに手を引かれながら立ち、大きな伸びを一回。・・・よし、先に進もう。

・・・

先に進んだ僕らの眼に映った光景は、とても残酷な物だった。

「なんだよ…なんだよこれ！」

僕の目に映った物は・・・。

——^{バラバラ}四股切断になった、イデオの三匹の変わり果てた亡骸だった。

理解を超えた現実には、僕らが圧倒されていると、ふと現実を引き戻す声が先の道から聞こえた。

「みいゝつけた。キミ達も殺してあげる…。」

「誰だっ！こんな事をしたのはお前か！」

僕の声に誘われるように、一匹のユキメノコが姿を現す。その手には、一振りでも何かもが切れてしまいそうな小刀を持っていた。

「あははっ。もちろんワタシだよ。さあ、こっちおいで。君もバラバラにしてあげるからあ。」

「先輩達っ！構えてくださいっ！」

フェインの声に正気に戻る。ありがとう、フェイン。

「絶対に…勝つぞっ！！」

「皆あ…ぐっちゃぐちゃにしてあげるう。」

叫び声にも近い声が木霊する。

僕は…僕は…。

——コイツを許さないッ！

第十四探検 c r u e l d e s t i n y 〽それはとても残酷に〽（後書き

チーム名のイデオとは、フランス語で愚か者を意味します。

突っ切った結果がこれでしたね。

第十五探検　r e v i v e　く死の運命に逆らってく（前書き）

二日連続投稿。

曾我氏の精神はもうボロボロだっ！

レグルス「自分で言うな自分で。」

第十五探検　r e v i v e　く死の運命に逆らってく

ルメリク s i d e

「汝の名はレシラム。真実の女神なり。我の名はレグルス。真実を追ひ求めし者なり。」

僕の、一番先頭に立って何かを呟き始めるレグルス。右手には白い杖が握られていた。その杖に、奇妙なデジャブを感じた気がする。のは何故だろうか。あんな杖なんか見たことも無い筈なのに。

「……いいですか皆さん。レグルス先輩が気を引いてくれている間に、作戦について説明しておきます。」

僕とポラリスを隅っこに固め、ひそひそと作戦を話すフェイン。かなり大雑把に纏めてみると、レグルスが敵を引き付けている間に、僕とフェインがサイドから後ろに回りこむ。ポラリスが足止めた隙に二匹で攻撃を叩き込むらしい。

「分かっていると思いますが、この作戦は一度つきりです。もし失敗したら、ボク達は無事に帰る事が出来ないかもしれない。」

「で、でも、やらないと絶対帰れないよね。だったら頑張ろう！」

ポラリスが皆を奮い立たせる。残酷な光景を見せられてもへこたれないのは、さすがとしか言いようがない。

「ああ、分かっている。無事に帰るぞ、皆で。」

後ろから、鉄と鉄がぶつかり合うような音が聞こえた。どうやら、もう戦っているようだ。互いに目配せした僕らは、さっき説明された通りに行動を開始する。

ポラリス side

（ここで……良いよね。）

レグルス君が戦っている所より、少し後ろにある岩に身を隠す。ユキメノコに、どうにか催眠術が届く位置だ。催眠術の発動には少し時間が掛かるから、もうそろそろ準備しようか。

鞆の中から「必中の種」を取り出し、口に含んで噛み砕く。一応説明しておく、しばらくの間攻撃が確実に当たる種だ。それだけなら良いのだが、なにぶんかなり不味い。苦味と酸味をこっちゃんにしたような味で、度胸試しにも使われる位不味い。．．正直吐きそう。

（でも、泣き言を言ってる場合じゃないよね。頑張らなきゃ。）

口に含んだ不味さに、少しだけ涙しながら自分を奮い立たせる。チヤンスは一回だけ。頑張ろう。

ルメリク side

銀水晶に体を隠しながら、先へと進む僕。これが普通の透き通った水晶なら、確実に気付かれていただろう。自然に感謝しながら、どうにかこうにかユキメノコの後ろに付く事が出来た。

（先輩。こっちです。）

ひそひそ声のフェインに導かれ、水晶と水晶の切れ目に付いた。ちょうど飛び掛れそうなポイントだ。

（ボクが合図したら、飛び掛ってください。3 . . . 2 . . . 1 . . . 0ッ！）

ポラリスから放たれた光線によって、ユキメノコの動きが止まると、同時に僕らは思いっきり飛び掛った。

「アクアテール！」

「アイアンテール！」

重力を味方に付けた僕は、水分を存分に含んだ尻尾を叩き付けた。タイプ相性は普通だが死角からの不意打ちとの事もあり、かなり効いただろう。よろめいているユキメノコに向かってもう一撃。フェインのアイアンテールも炸裂し、なすすべも無くユキメノコは地面に突っ伏した。

「. . . 気絶してる。どうすんのこれ。」

地面に突っ伏してるユキメノコの頬を引っ張りながら、レグルスが喋る。ユキメノコもしくはは気絶しているだろう。

「しばらくは起きないだろうし、先に進みましょうか。」

尻尾をさすりながらフェインが呟く。尻尾が痛かったのだろうか。

「……待つて。イデオの三匹のお墓を作つてあげようよ。」

ポラリスが、俯きながら言った。

「だって、こんなの可哀想すぎるよ。せめて、お墓だけでいいから・
・。」

そう言つて、泣きじゃくってしまった。ポラリスの気持ちが痛いほど伝わってくる。僕ら三匹は、ただ黙る事しか出来なかった。

レグルス side

「分かった。皆で埋めてあげよう。」

半分ぐらい無意識だったかもしれない。僕の口から勝手に飛び出た言葉は、探検隊のリーダーとしてあるまじき言葉だった。墓を作っている途中に、さっきのユキメノコが襲ってくるかもしれない。もしそうになったら、僕らは多分・・。

「やろつ。」

「やりましょう。」

二匹の音が響く。どうやら彼らも、探検隊としてあるまじき行為に走るらしい。

「分かった。皆でお墓を作ってあげよう。」

・・・

ばらばらになった三匹を見つめ、フェインが何かを呟いている。

「……フェイン？一体どうした。」

僕の心配を無視し、ぶつぶつと独り言。しばらく見つめていたが、全く呼びかけに答えてくれなかった。

諦めて戻ろうとすると、静かにポツリとこつ漏らした。

「……ねえ先輩。デイルさんの遺体をここに持ってきてください。もしかしたら、間に合うかも知れません。」

「間に合う？何の事？」

「良いから急いで。再構築できるかも。」

「再構築？なに・・・それ？」

僕の質問に、なにやら難しい顔。質問に答える気は全く無さそうな

ので、言われた通りに持ってきた。

「やっぱり思った通り。先輩、デイルさんは何故バラバラになってないのか分かりますか？」

そう。フェインの言う通り、何故かデイルだけはバラバラになっていない。……でも、一体何故？

「恐らくあっちの二匹は、殺された後にバラバラにされたんでしょ。しかしデイルさんは、ユキメノコから見えない位置で亡くなったんだと思います。だから損傷が少ない。」

なるほど。そう考えれば納得できる。

「さて、今から再構築の儀をします。3メートルぐらいは離れて下さい。」

言われるがまま、フェインから離れる。大丈夫だろうか……。

「行きますよ。——リコールコンチエルト天使協奏曲。」

真っ白な光が、フェインを、僕らを、銀水晶を照らしていく。

・・・

かなり長い時間が経った。いや、そんなに時間は経っていないかもしれないけど、少なくとも僕には長かった気がする。

「どうやら、成功したようです．．．ね．．．。気絶は．．．していませんが。」

苦しそうに胸を押さえ、その場にしゃがみ込むフェイン。顔色から見ても、かなりきつそうだ。

「立てるか、フェイン。」

「ええ．．．なんとか。」

ふらふらとしてかなり危なっかしい。何処かで休ませてあげたいが．．．。

「レグルス。僕とポリスちゃんが二匹とも運ぶから。お前は先に進んでくれないか？もうすぐ奥地だろうし。」

ルメリク．．．。良いのか？

「構いやしない。その代わり、ちゃんと報告してよ。」

分かった。行ってくる。

「気を付けてね。レグルス君。」

大丈夫。行ってくる。

・
・
・

行ってくるとは言ったものの、三分も歩かない内に奥地に付いた。
すっごく拍子抜けだな。おい。

「・・・またあれ？なんつーのこの……デジャブ？」

ええはい。なんかね。水晶玉が浮かんでるの。そして、なんか地底湖が広がってるの。・・・絶対どこかで見たことあるよねこれ。

などと言った訳の分からない事を考えていると、突如水晶玉が眩く光り……。。

——光に飲み込まれた。

第十五探検　r e v i v e　く死の運命に逆らってく（後書き）

ポラリス「ポラリスと！」

そろそろこのコーナーが面倒な作者の！

ポラリス「後書きコーナー！！」

いえい。どんどん、パフパフ！

ポラリス「はい。と言う訳で第四回後書きコーナーですよ！」

今回の話題はこちら！

・・・あ、ごめん。それ取って。あ、いやそれじゃなくて・・・そう、それ。

ポラリス「ほい。」

ん、どうも。さて、気を取り直して今回の話題はこちら！

ポラリス「フェイン君の技の、リコールコンチェルト天使協奏曲についてです！・・・ねえ作者。ここでチート技出して大丈夫なの？次に死者が出たら、何でこの技使わなかったのとか来るよ？」

大丈夫。使えない理由がちゃんとあるから。なんで使えないかは今後フェイン君に語らせます。

ポラリス「本当に大丈夫？責任は自分で取ってよ。」

へいへい。ま、それは置いとくとして、技解説に移ろう。この技は、もう見たまんまだね。死者を蘇らせる技だ。ただし、蘇らせるためにはいくつか条件があるみたい。

ポラリス「このメモによると、原型を止めていない者は蘇生不可能。生きている姿をフェイン君が見ていないと蘇生不可能。死ぬ事が義務づけられている者は蘇生不可能らしいよ。最後のこれって何？」

その内分かるよ。その内ね。

第十六探検 not delete 追憶記憶? (前書き)

今回はとってもハートフル(ボッコ)なお話です。

心してどろぞー！

第十六探検 not delete 追憶記憶??

レグルス side

?????

光に飲み込まれてたどり着いた先は、小さな村。正確に言えば、小さな村の残骸だった。あらゆる建物が炎に包まれており、ここでも何かあった事は容易に想像出来る。

「燃えてるのか？一体、何があったんだ……？」

気になった僕は、燃え盛る民家の方に近づこうとする。だが…。

「何だこれ……。体が動かない……。」

誰かに足を固定されているかのように、どれだけ力を入れても全く動かない。ガラスのケースに入れられている様だった。

「んぎぎぎぎ……。やっぱり駄目だ。」

何とかしようともがいていると、ふと向こうの方からポケモンがやってくるのが見えた。

「ヒトカゲと……ロコン？」

傷だらけのヒトカゲが、ロコンを背負ってこちらへと。ロコンはど

うやら意識を失っているらしく、少しぐったりとしていた。ヒトカゲもヒトカゲで、苦悶な表情を浮かべている。傷が痛むのだろうか？ 少しかり不憫に思った僕は、肩からぶら下げてある鞆の中に入っていたオレンの実を分けてあげる事に……。

．．あのー、無視はやめて欲しいな。いや、気持ちは分かるけどさ。誰だって突然オレンの実を渡されたら戸惑うと思うよ。

でも、でも！

無視はさすがにどうかと思うんだ！正直悲しいよ！もう泣きそうだよ！．．とかはさすがに思っていないけど、やっぱり不思議だ。まるで自分が、彼らから見えていないような気がする。

そして、不思議な事がもう一つ。

——傷だらけのヒトカゲに背負われていたロコンは、ポラリスにそっくりだった。

横顔をちらつと覗いただけ。だけど、今のは間違いなくポラリスに似ていた。

．．でも、何で？何で彼女がいるんだ？

（今度聞いてみよう……。）

炎に包まれていた景色が、瞬く間に白に変わる。一面に真っ白なペンキが塗りたいくらい、やはりどこかで見たような空間に吸い込まれた。

三人称 side

溪谷を抜けてから、どれくらいの時間が経ったのだろうか。広葉樹に囲まれた森の中で、彼らは休憩を取る事にした。この辺りにポケモンの気配は無く、休むのにかなり適している。

「デイルさん……。大丈夫かな？」

焚き火を囲みながら、心配そうにポラリスが呟く。その思いは、先程目を覚まし、またすぐ寝てしまったデイルに向けられている。

「……どの道、いつかは教えないといけない事だ。」

揺らいでいる炎を見つめ、ルメリクが呟く。その顔からも、心配の表情が窺い知れた。

「そっか……。ごめん。お水……。飲んでくる。」

そう言い残し、小さな沢がある方向へと走って行くポラリス。その後ろ姿を見つめ、ルメリクは小さなため息を吐いた。

（無理してる…よな。ポラリスも、僕も。）

銀水晶の溪谷で見た物は、まだ幼さが残る彼らにとって、かなり衝撃的な物だった。もっとも、一番幼い筈のフェインが一番落ち着いていたのは、可笑しいと言えば可笑しかったが。

（帰ったら、シリウスさんに事情を話して、しばらくお休みでも貰

おう。みんなでゆっくりして、この事は忘れてしまおう。）

草の上に寝っ転がり、葉っぱの隙間から覗いた星を数える。ルメリクが睡魔に負けそうになった時、焚き火の始末をしていない事に気づいた。慌てて飛び起き、火の上に水を被せる。

（明日は……少し早く起きて出発しよう。）

星を数える事も無く、一瞬のうちに睡魔に降伏したルメリク。瞼を閉じた数秒後には、すうすうと寝息を立てていた。

ポラリス side

綺麗に澄んだ水を飲み、彼らが寝付いているだろう所に戻る。案の定、ルメリク君も寝付いていた。おぞましい寝相に苦笑いを浮かべながら、デイルさんの寝付いている場所にルメリク君を運んだ。

（……あれ？フェイン君がいない。）

先程まで寝ていた場所から、フェイン君の姿が消えていた。木に立てかけられている彼の鞆から、ピンク色の宝石が飛び出していた。

（……これ、ペンダントかな？気になるけど、あまり触るのも良くないよね。）

あまり触れないようにして、鞆の中にペンダントを戻す。フェイン君はすぐ戻ってくるだろうし、私もそろそろ寝付こう。

横になり目を閉じる。閉じた瞼の裏側に、今日あった事が次々と浮かんでくる。

（怖いし、思い出したくないよ……。）

そういえば、レグルス君は大丈夫なのかな……。

彼の事だから大丈夫だろうと思いつつ、心のどこかで無事を祈っている私が居た。

次の日

「…やっぱり。そんな事だと思ってました。」

ディルさんにすべてを話した私達に、こんな言葉が飛び込んだ。

「大丈夫です。自分なら平気ですから。ダンジョンで命を落とす探検隊なんて、いくらでも居ます。」

その言葉が、ディルさんの強がりなのかは分からない。本心かもしれない。そんな姿を見て、私達は静かに黙る事しか出来なかった。

「さあ、行きましょう。あなた方のギルドの親方に、報告をしないとけませんしね。」

につこりと微笑んだデイルさんに付いて行く私達。

「デイルさん、無理してますね。」

フェイン君の声に、何も言える事は無かった。

・・・

シリウスのギルド

「……………そう。そんな事があったのね。」

手にした報告書とにらめっこしながら、シリウスさんが呟いた。手にしたペンで時折、何かを書き込んでいる様だったが、私の場所からは見えなかった。

「……………お疲れ様。ルメリク君以外は出て行ってくれる？」

ペンを器用に回しながら、ちいさな欠伸^{あくび}を一つ。シリウスさんのこの発言に関してはもう慣れた。

私とフェイン君は、互いに目配せ。肩をすくめながら部屋を出る。

・
・
・

ルメリク side

二匹が部屋から出て行った瞬間、シリウスのその目線が、鋭い物に変わった。

「で、どうだったの。ピースの回収は出来たのかしら？」

机の上に置いてあった一升瓶を手繰り寄せ、小さく溜息を付いた。

「……僕自身は奥に行けなかったんですが、レグルスが搜索しています。レグルスが帰ってきた時にでも聞いてやってください。」

嘘偽り無く、全てを話した。

イディオの二匹の最期や、謎のユキメノコの事。そして、ディルさんの事も。

「……………。君達も、辛い思いをしたわね。少し休みをあげるから、ゆっくり休みなさい。」

小さくはにかんだ顔は、いつもの温かい顔に戻っていた。手に持ったコップに、一升瓶の中の液体おみけを注ぎながら。

…その動作が無ければ、ちゃんとしたギルド長に見えるんだけどね。

——時は数刻ほど前に遡る。

三人称 s i d e

ポラリスの部屋

「…部屋に入っていくなり、女の子のベッドに飛び込む勇氣は褒めてあげたいよ。でもさ、それは流石にマナー違反だと思うんだ。」

ジツとした目線をぶつけながら、一匹のロコン——ポラリスが喋った。どうやらその言葉は、ただいまベッドに絶賛ダイビング中のピカチュウにぶつけられているらしい。

「他人のベッドに飛び込んでしまうのは、きっとボクの癖なんです。」

ぎざぎざ尻尾を左右に揺らしながら、先程のピカチュウ——フェインがのたまう。

「…もういい。そこで良いから、君の事について聞かせて欲しいの。」

諦めたように首を振り、ベッドに乗っかるポラリス。

「…何の事ですかね。」

とぼけた表情を浮かべながら、黄色く尖った耳をぴよこりと動かす。自然な仕草の中に、少しだけ焦燥が感じられたのは気のせいなのか。

「とぼけなくても良いよ。君の技——リコールコンチェルト天使協奏曲に付いて教えてもらいたいだけだし。」

「……嫌って言うたら？」

「フェイン君の寝顔写真をばら撒く。」

「喜んで言わせていただきます。」

深い深い溜息を付き、しっかりとした口調で話し始めるフェイン。

「お話は、少し前に遡ります。」

・・・

今から、少しだけ昔のお話です。ボクは昔、父と母と一緒に旅をしていました。父も母も、かなり有名な医者でした。病院も無い村に行つては、そこに居る患者さんを診てあげたり、若者に医療を学ばせたり…。

様々な事をしていました。もちろん、ボクもそんな両親を誇りに思っていましたし、今でも大好きです。

……問題が起こったのは、ここからずっと東の方にある村、フィレストに行く途中でした。物盗りに襲われ、ボクを人質に金品を要求されました。当然、旅の途中ですからそんな物は持っていません。父も母も必死に抵抗しました。せめてボクだけでも助かつて欲しかったらしいです。

その願いは叶ったらしく、父も母も殺され、残ったのはボク一人だけでした。そのころボクは幼かったので、何が起こったかは理解できません。仕方なくボクは、父の遺言通りにフィレストと言う村に向かいました。

その村では、正体不明の伝染病が流行っていたらしく、多くの人々

が苦しんでいました。地面に横たわる人々を見て、幼いボクが何を思ったかは分かりません。気が付いたら、銀水晶の洞窟で使ったような力を使っていました。

その姿を見た村の方々が、救世主だの何だのと騒ぎ立て、気が付いたらボクは、フィレストに住む事になっていました。

時は少し流れて、今からちょうど一年前の事です。そろそろ村に馴染んできたボクは、銀水晶の洞窟で使った力…奇跡の力とでも呼びましょうか。

まあ、それを乱用していたんです。ところがある日、その力の危険性について知ってしまいました。その力は乱用しすぎると、肉体的に退化してしまうらしいのです。

ただでさえ背が小さいのに、これ以上小さくなっては困る！との事で、その村の村長に直談判しに行きました。もうこの力は使いたくないと。

そうしたら、その村長さんどうしたと思います？夜になって、村の大人達と家に入り込んできたんですよ。そして、かなり痛めつけられました。ええ、ぼっこぼこです。次にそんな事言ったらもつと酷いことするぞって脅されて、次の日から虐待と迫害の毎日です。

仲が良かった友達も口を利いてくれなくなりました。その辺りからですかね。ボクが人を信じられなくなっただけのは。

…どんな事をされてたのかって？聞きたいんですかホントに？

つたく、他の方々には内緒ですよ。そうだなあ……。熱湯をかけられたり、鉄パイプのような物で殴られたりとかかな。それはまだ軽い方ですけど。もっと酷い事になると……いえ、これは言いたくありません。

さ、さて、本題に戻しましょう。

そんな虐待ばかり受けてたんですけど、そんな日々から助け出してくれた人がいました。ポラリスさんも知っていると思いますけど……。

．．．エリアスさんです。あの人がボクを助け出してくれました。仕事でこちらに来ていたらしく、色々なお話を聞かせてくれました。

この人なら、心を許せる！．．．とでも、思ってたんでしょう。エリアスさんに付いて、ボクはこのギルドに向かいました。

そこで貴方達と出会って、今に至るわけです。

長かったですね。軽く食事でも取りましようか。

さあ、行きましょう。

……泣いてるんですか？

優しいですね、あなたは。

——その優しさは、もっと別の事に使ってくださいね。

第十六探検 not delete 追憶記憶? (後書き)

どうでしたか? とってもハートフル(ボッコ)なお話ですね♪

ポラリス「……ひどいよ。こんなの。」

大人のエゴって奴さ。

第十七探検 i n s a n i t y 〵束の間の休息〵（前書き）

今回の話は一切暗くないです。

ハートフルです!!

第十七探検 i n s a n i t y 束の間の休息

シリウスの部屋

「シリウスー。レグルスが帰ってきたってさー。」

風に揺られ揺られて、ふわふわと漂っているワタッコ——ワズン。ふさふさの綿毛を揺らし、少し立派な椅子に腰掛けているバシャーモに向かって喋る。

「あらそう。じゃあ、私の部屋に来るように伝えてくれるかしら。」

一点の曇りもないワイングラスに、並々と紫色の液体を注ぎ込みながらそう呟いた。その声を聞いたワズンはしばらく嫌な顔をしていたが、やがて部屋を出て行った。彼女に逆らっても勝てないと踏んだのだろう。

「まったく。ポケモン使い荒いつつの。」

扉の向こうでワズンの声が聞こえた気がしたが、彼女は気にしなかった。

・・・

「入りなさい。鍵は開いてるわ。」

ワズンが出て行ってほんの数分もしないうちに、小さなノックの音が部屋に響いた。ノックの主はしばらく立ち往生していたようだったが、シリウスの声を聞いたらしく、静かに部屋に入り込んできた。

「えっと。ただいま帰りました。」

尻尾の炎をちらつかせ、オレンジ色の体を持つヒトカゲ——レグルスが、少し遠慮がちにお辞儀をする。体中が泥だらけになっており、少しだけ臭う。

「……まず、その体について説明してもらおうかしら。何があったの？」

泥だらけのレグルスを見て、訝しげな視線をぶつけるシリウス。その視線を知ってか知らずしてか、レグルスは淡々と説明を始める。

「えとですね、帰り道で色々ありましてですね……。まあ、単純に言ってしまうと転びました。」

恥ずかしそうに下を向きながら説明するレグルス。その姿を見て少し呆れながら、シリウスは話を変える。

「……後で洗っておきなさい。っと、それよりもレグルス君、奥地で何か見つけたのかしら？」

何か見つけたのかしら、という言葉に反応するレグルス。どうやら何かを見つけたらしい。

「実は……。」

地底湖で見た事を淡々と話すレグルス。不思議な映像や、ヒトカゲとロコンの事などをざっくりと話し終えた後、ふと思い出したように付け足した。

「あ、そう言えばですけど。なんかこんな物が鞆の中に入っていました。……パズルのピースですかね？」

泥はねが目立つ鞆の中から、青いひと欠片のピースを取り出す。この世の物とは思えない質感に少し戸惑いながらも。

「…預かつとく。」

レグルスが手に出したピースをひったくる様に奪うシリウス。子供が危ない物を持っている時の取り上げ方に良く似ている。

「どうかしたんですか？何も奪わなくてもいいのに。」

ひったくり方に違和感を覚えたらしく、不思議そうに見つめる瞳が二つ。

「子供が危険な物持ってたら取り上げるのが普通でしょ。」

「どういう事ですかそれ？」

きっぱりと言い切ったシリウスに対し、相変わらず疑問符のレグルス。

「さあ？私も分かんないわよ。」

「………もう良いです。そういえばディルさんはどうなったんです

か？」

「先にギルドに帰ったらいいわ。実際に私が見た訳じゃないけどね。」

その言葉を聞いたレグルスはがっくりと肩を落とした。酷く残念そうに。

「何で貴方ががっかりするのよ？理由が分からないんだけど？」

「いえその……大丈夫かなって。」

レグルスの脳裏には、気絶したデイルの姿が映っていた。あの時は気が付いていなかったが、もし彼が起きて、二匹が死んだ事を知らされたら……。

「大丈夫とは言えないけど……探検隊である以上は仕方ないかもしれないわね。」

「分かってます。でも……。」

「他人の心配をしている暇があつたら自分達の心配をしなさい。次は貴方達の番かもしれないのよ。」

ぴしゃりと言い放つシリウス。

「っ！そんな言い方しなくても良いじゃないですか！もういいです！シリウスさんの馬鹿っ！」

キツとシリウスを睨みつけ、大きな声で吐き捨てるレグルス。最後

まで言い終わった後、ドアを激しく閉めながら去っていった。

(……。)

そんな少年の声を聞きながら、少しだけ後悔するシリウス。幼い少年に辛い現実を突きつけてしまった事を。

実際、シリウスの言っている事は正しい。探検隊である以上他人は二の次であり、自分を中心に見なければいけない。何時自分が死ぬとも分らないこの世界で過ごす為には一番大切なのだ。

(駄目な……ギルド長ね。私はただ……。)

壁を思いつきり殴る。殴られた壁は当然のごとくへこみ、手からは少量の血が流れる。重力に従い流れていく血をじっと見つめながら、ちいさな溜息を付く。

「シリウスさん。一杯どうですか」

振り返った後ろに、一匹のブイゼル——ルハウト。手と頭に一本ずつ缶ビールを乗せながら、屈託のない笑みを見せる。

「……頂く。」

「あいよ毎度あり」

手にしたビールを一気に喉に通しながら、襲い掛かってくる不思議な気分に身を委ねる。

「あなたの悩み、良ければ聞きますよ」

「聞いてくれるのかしら？とつてもちつぱけな悩みだけど。」

「ま、話半分ですがね。」

——それでいいわ。シリウスはそう言つて、先程の事を話し始めた。

・・・

「成る程」親方としては正しい事を言つたけど、幼い心に酷い事を言つてしまったという事ですな。」

一通り話を聞き終わつたルハウトは、欠伸交じりにそう言つた。聞いていないように見えてしっかりと聞いていたらしい。

「まあ、ね。」

「・・・青いですね。」ま、若いのにそこまで考えられるだけ立派ですよ。」

そう言い残し、部屋から出て行こうとするルハウト。ドアに手を掛け、振り返つてこう言つた。

「レグルス君は、ちゃんと分かつてくれると思いますよ。」貴方が思つてるほど彼は幼くないですから。」

「幼いのは私の方…かしら。」

誰ともなしにそう言った。

レグルス side

翌日

「つー訳だお前ら。出て行け。」

休み初日、寝ぼけ眼を目覚めさせてくれたのはシャムさん。どうせならもつと良い知らせで目覚めたかったんだけどさ。

・・・あれ？今なんて？

「だーかーらー！この部屋から出て行けって言っただの！」

「すみませんシャムさん。話のつながりが理解できません。」

やったらと落ち着いたピカチュウ——フェインが、寝起き特有の不機嫌さを兼ね備えながらも静かに話す。低血圧なのかコイツ？

「あー悪い。最初から説明するとだなあ……。」

シヤムさんの説明を要約するところという事だ。

今日の昼ぐらいから明後日まで、ポケモンギルド連盟のお偉いさんが視察に来るらしい。そこまでなら良いのだが、問題は別にある。

昨日の夜にシヤムさんが気付いたみたいなのだが、実はギルドに加入するために条件があるらしい。正確には数えていないらしいのだが、100ほどある。

問題はここから。

第47条 『十四歳未満のギルド入門は原則禁止。』

はいアウトー。ちなみに言っておくと僕は12歳、ルメリクとポラリスは13歳、フェインは年齢不詳。そういえばあいつ何歳なんだろうか。

年齢不詳なら良いと思うのだが、どうやらそうもいかないらしい。

第49条 『素性に不明点がある場合の入門を禁止とする。』

「と言う訳だ。悪いが明後日まで出てっくれ。」

はい。こうして僕らは、朝っぱらからギルドを追い出される事になりました。

……勘弁してくんない？

・
・
・

「で、どうするんすか先輩方。四人揃って路頭に迷う羽目になるんですが。」

大きな大きな溜息。どうするって言われてもねえ…。

「ホテルにでも泊まる？」

「却下。そんなお金ないし、そもそもこんな寂れた町にホテルがあ

と思う?。」

それもそっか。じゃあ…。

「誰か親しい人に話を話して、泊めてもらっ?。」

「却下です。親しい人って誰ですか?。」

ことごとく案を却下されていると、ポラリスがふと呟く。

「私の家なら……良いかも。」

「家え?ポラリスの家?。」

「うん。私確認してくるから!。」

バタバタと駆け出していくポラリスを見送る。ちょうど曲がり角を曲がり、ポラリスの姿が見えなくなった辺りでフェインが口を開く。

「さて、ボクも少し行かないといけない所があるんで。」

そう言つて、ポラリスとは逆方向へと歩き出すフェイン。すかさずそれを止める僕ら。

「ちょ、おまつ!何処行くつもり!?。」

くるりと背を向け、おふざけ半分のフェインの声。

「うーん……。しいて言うなら、必殺仕事人な感じですかね。」

「訳分かんないんだけど。」

焦りを通り越して呆れている僕らを尻目に去っていく馬鹿ネズミ。

ナガレボシ（このチーム）ってさ、いろんな意味でバラバラだよね。
嗚呼どうしよう、頭痛くなってきた。

三人称 s i d e

その日の夜

闇に照らされた道を往く二つの金色の目。黒い体毛からあふれ出る
威厳が、只者でない証明をしていた。

——眼光がんこうポケモンのレントラー。

「そこの茂みに隠れてやがるのは誰だ。」

そのレントラーが口を開いた先には、草むらに隠れていたのだろう。
一匹のピカチュウがいた。

「ずいぶん目がよろしい事で。」

「悪いな。昔ッから目は良かったもんでな。……探検隊の野郎か？」
レントラーが警戒するのも無理はない。このレントラーは何かの事情で追われているらしいからだ。

「さあ？ボクをやっつければ教えてあげますけど。」

「ほお。俺とやろうと言うのか。なかなか面白いちびっ子だな。」

二匹ともが攻撃態勢に入る。素早いはずのレントラーが攻撃を仕掛けようとした瞬間、ピカチュウの姿が消えてしまう。

（チッ！上かあ！）

上空に気配を感じたレントラーは、空に向かって放電を繰り出す。とてつもない高圧の電流が上空を切り裂いたが、そこにもピカチュウはいなかった。

（馬鹿なっ！そんなはずがッ！）

ざくり。ざくりざくりざくり。

風で形成された刃がレントラーに食い込み、無数の傷を生み出す。一つ一つの傷が非常に深く、あっという間にレントラーは真っ赤に

染まった。

「——風刃幻想曲。スラストファンタジア 惜しかったですねレントラーさん。」

「あ……ぐ……。てめ……一体……。」

息も絶え絶えなレントラーに向かい、にっこりと微笑みかけるピカチユウ。

「ボクの名前……聞きたいですか？いいですよ。冥土の土産に持っててください。」

「——フェインと言います。」

月明かりに照らされた道端に、狂気の笑みを浮かべる一匹のピカチユウ。

「ま、いつか。これで第一計画完了つと。」

——血塗られた体を左右に揺らしながら……。

第十七探検 i n s a n i t y

く束の間の休息く（後書き）

ね？ハートフルだったでしょ？

え？違うつて？

またまた嘘が上手なんだからあ！

第十八探検 holiday 〰ナガレボシの休日〰（前書き）

日常プラス伏線回。あと一つの伏線は次回で。

第十八探検 holiday くナガレボシの休日く

レグルスside

「はあ．．．はあ．．．。きよ、許可貰ったから、私の家使っても良いよ。」

あの馬鹿ネズミが去ってから数十分後。息を切らせて走ってきたポラリスが、僕たち二人を見つめて不思議そうに首を傾げた。

「あれ。フェイン君は何処行っただの？」

「「必殺仕事人。」」

「……はい？」

僕とルメリクの重なった声に、さらに首を傾げるポラリス。ここでやり取りしても疲れるだけだし、ひとまずポラリスの家に行こうという提案となった。

．．．

ポラリスの家

「着いたよ。ここが私の家。」

先程の場所から歩き出しておおよそ十五分。目の前に見えたのは、おせじにも豪華というには程遠い、外壁が茶色くすすけた小さな一軒屋だった。

「ここがポラリスの家……。一人で住んでるのか？」

ルメリクの質問に少し嫌そうな顔をしながら、ポラリスは俯いた。

「お母さん……。今入院してるから……。」

ポラリスの発言に、しまったと言う顔になるルメリク。

「あ……。ごめん、知らなかったから……。」

「別に良いよ。気にしてない。」

小さく笑顔を見せるポラリスに、少し場の空気が暖くなる。玄関の扉を開け、廊下の奥に入ってみると、一人で暮らすには十分すぎるほどの生活空間が広がっていた。

「おー！リビングだあ！」

感嘆の声を上げる僕。今までギルド暮らしたたから、家は見た事があっても中に入った事は無い。そんな僕にとって、他人の家に行くのはわくわく以外の何物でもないんです。

「…なあ、そんな驚く事か？」

「レグルス君……変です。」

二匹の視線が痛い。割と本気で痛い。

…そんな視線を全力で振り払い、こほんと咳払いを一つ。…駄目だ、まだ視線が痛い。どうすれば良いんだ僕！誰かヘルプ！ヘルプミー！

……はっ、そうだ！話を変えてみよう！

「で、何処に荷物置けばいいのかな？」

平静を装い、ポラリスに尋ねる僕。どうやら効き目はあったらしく、いつもの視線に変わる。

……よし勝った！

「うん。じゃあ、ここの棚に固めて置いといて。」

指定された小さな棚に荷物を置く。置ききれない荷物は棚の傍に固める。とここで、結構重大な忘れ物をした事に気付く。

（あ、杖………忘れた……。）

レシラムを呼び出すときに使う白陽の杖。やべ、ギルドに思いつき
り置いてきちゃった。どうしようかと考えて、至った結論はこれだ。

(……ま、いつか。)

結論としては最低なのだが、今から取りに帰っても門前払いされる
に違いない。時計を見てみると、現在十時半。最悪な事に、これか
らお偉いさんが来る時間帯だ。今行ったら間違いなくギルドに迷惑
がかかるだろうし、しばらくレシラムには眠っていてもらおう。

怒るだろうなあ……。僕の脳内には、口を尖らせて、くどくど怒る
レシラムの姿が浮かんでいた。

「…レグルス？なにボーっと突っ立ってんの？」

ルメリクの声に、考えを巡らせるのをストップ。すると、ポラリス
が僕の顔を覗き込んだ。

「話…聞いてたよね？」

「……………」

この時ばかり、ポラリスの視線を恐怖に感じた事はなかった。多分
だけどこれからも。

「聞いてなかったんだね。」

「……………はい。御免なさい。」

仕方ないとばかりに首を振り、もう一度説明を始めるポラリス。どうやら部屋割りのことに付いてらしい。

「えっと、レグルス君はその廊下の突き当たりにある青い扉の部屋を使って。ルメリク君はその隣の茶色い扉の部屋。私はここにいるから、わかんない事があつたら伝えてね。」

小さく返事を返し、言われた通りに廊下に向かう僕を慌てて引き止めるポラリス。

「あ、ちょっと待って。……ハイ鍵。失くしたら怒るからね。」

僕とルメリクに一本ずつ鍵を渡し、最後に一つ付け加える。……ちよつと怖かったよ。

気を取り直し、鍵に付いているタグをしてみる。「お母さんの部屋」と書かれたそれは、だいぶ文字が劣化して見難くなっていた。……ずいぶん古い物みたいだ。

「あ、そうだ。お昼ごはんどうする？私が作るつか？」

現在、時刻は十時半ちょい過ぎ。お昼ごはんを食べるにはまだ少し早いぐらいだけど、ポラリス曰く、

「こういうのは早めに準備した方が良いよ。」らしい。

「……一応聞いておくけどさ、ポラリスって料理作れるんだよね？なんか凄く嫌な予感がしてるんだけどさ。」

ルメリクが尋ねると、元気一杯の表情を見せるポラリス。

「任せてよ！私こついつの得意だし、お母さんから習った事もあるんだから！」

ここまで言われると、引き下がるしかないよね……。習った事があるのなら大丈夫だとは思うけれど。

ただ、体の底から湧き上がってくるこの気持ちは一体何なんだろう……。どうしてかな、ポラリスちゃん的笑顔がすごく不安！

「ねえ、ひよつとして疑ってる？」

「え！？ぜ、全然疑ってな、ないよ！？う、うん！」

明らかにキョドっているルメリクの返答。このままだとまずい事になる気しかなかった僕は、ルメリクを思いつきり引きずり、二階への階段がある廊下へと全力疾走。

「料理お願いねー！」と言う、全く心にならない言葉を残しながら……。

・
・
・

「……なあレグルス。ポラリスが料理できると思うか？」

場所は変わって二階。深刻な顔をしたルメリクが、僕に話しかけてきた。もちろん、返す答えはこうだ。

「間違いなく出来ないだろうね。」

「どうする？一緒に逃げるか。」

そう言っ窓を指差す。…そんな怪盗みたいな事しなくてもいいとは思っただけ……。

ただ、一つだけとても気になる事があるんだ。……この、階段の下から漂ってくる不吉な匂いと煙は何？なんとなくだけど死の香りがあるんだけど。

「なあ、ルメリク。」

「何だ？」

「逃げよう。何処か遠くへ。」

そう言っ、僕らがどうにか通れるぐらいの窓に手を掛ける。二階ぐらいの高さだったら多分大丈夫だろうから。窓を開け、飛び出す準備が万端になった。さあ、行こう！

「二人ともー。味見してみてくれないー？」

僕の耳には確かに、彼女の声が悪魔の囁きに聞こえた。多分、それは幻聴じゃないだろう。

・
・
・

「ごめんねー。あんまり料理した事ないから、ちょっぴり辛いかも知れない。」

そう言っ僕らに差し出したのは、小鉢に入った長細い鉄のようななにか。ポラリス曰く、「これはきんぴらゴボウ。とってもおいしいんだよ！」だそうです。

……待つて。なにかが違う。だつて、普通のきんぴらゴボウは茶色なんだ。それなのに、ポラリスが作った奴は、灰色だよ。それに、普通のきんぴらゴボウは壁に刺さらないんだよ。

分かるかいポラリス。これは食べ物じゃない。どっちかつーと凶器だ。

…と、突っ込みたいのを堪え、とてつもなくオブラートで包んだ言葉を掛ける。

「ねえ、ポラリスちゃん。これ、味見した？」

「ふえ？味見って何？」

…これは間違いない。食べるとまずい（色々な意味で）パターンだ！

「ルメリク。おなか減ってるだろ？先食べるよ。」

「…いやいや。こう言うのはリーダーである君から先に食べるべきだ。」

「何言ってるんだよ。リーダーが譲ってあげてるんだから素直に貰え。」

「恐れ多くてそんな事出来ないよ。先に食べてよレグルス。」

こんな具合に、僕らが擦り付け合いをしていると、そのやり取りを不思議そうに見つめていたポラリスが口を開いた。

「…二人で一緒に食べたらどう？」

嗚呼、やっぱりこの子は悪魔だ。つかこれ確信犯だよ絶対。とはいえ、今の空気で断る事が出来ないのも事実であるからして…。…食べるか。割と本気で嫌だけど。

「よしルメリク。二人で一気に食べるぞ。」

二人で の部分を強調しながら、ルメリク（と僕の心）に言い聞かせる。ルメリクがこちらを睨んでいるような気もするけれど、そんな事知ったこっちゃない。だって、僕一人が食べる事になったら

ルメリクが苦しまないじゃん。悪いけど僕の中に、自己犠牲の精神なんてどこにもない。

「レグルス。一生恨んでやるからな。」

ルメリクの発言を華麗にスルーしながら、細長い鉄の塊を一本ずつ手に持った。ルメリクには少し大きめの鉄をプレゼント。

「行くぞ……。」

「……ぜってー恨むからな。」

「「せーの!」」

ガリツボキツベリツと言う、本来のきんぴらゴボウにはありえない音を立て、きんぴらゴボウのような何かは噛み砕かれた。口の中に絶望を固めたような味が広がった。苦味とも酸味とも取れないその味は、間違いなく凶器その物だった。

「どうお?どんな味?」

僕らの苦しみを何も知らないポラリスは、涙を堪えようと必死になっっている僕らの顔を覗き込む。何とか飲み込んだ僕は、出来るだけ傷つけないように、そもでもって率直な感想を口にだした。

「なんつーの……何か、こう……理不尽な味がする。」

「り、理不尽?それって味に使える感想なの?」

ポラリスの言っている事は確かにそうだ。でも、それ以外に味の感

想が見当たらないんだ。

「る、ルメリク君はどう？どんな味がする？」

「う……えっと、あの…その…絶望？」

「絶望って…。そんなに酷い味なの？」

ポラリスの発言に、全力で頷く僕ら。これは本当に不味い。いやマジで。

「じゃあ、私も食べてみるね。」

そう言っつて、細長い鉄のような何かを口に含むポラリス。噛み砕く音が聞こえた瞬間、ポラリスの顔色がどんどん悪くなっていく。

「…ごめんね。辛い思いさせちゃって。」

目に涙を浮かべながら、僕らに謝ってくるポラリス。いまさら謝られても遅いです。

「ねえレグルスとポラリス。この世に絶望があるとしたら、それは多分、このごぼつの事じゃないのかな？少なくとも僕は、そう思うんだ。」

ルメリクの発言に、僕らは静かに頷いた。

・
・
・

食事と言つ名の拷問を済ませた僕は、一旦部屋に戻る事にした。僕が使っている、ポリリスのお母さんの部屋は、正直な所かなり汚い。窓の淵にも埃が積もっていたり、床の上にも小さなゴミくずが溜まっていた。

（さつて、何処から手を付けようか……。）

水で湿らせた雑巾で、床から窓から箆笥から、全部を綺麗に拭いていく。全部拭き終わり、埃っぽかった空気を換気して……。気が付いたら、さっきまでの暖かい日差しは消えうせ、差し込む光は蜜柑色に染まっていた。

（もう夕方……。掃除していると時間が経つのが早く感じるな……。
ってあれ、何だこれ。箱と写真？）

掃除をしている時に落つこちたのだろうか。僕の足元には、文庫本

ぐらいのひらぺったい小箱と、古びてかなり劣化している一枚の写真が落ちていた。小箱を持ち上げてみると、非常に軽い。振つてみると、中からカラカラと乾いた音がした。……何か入っているのだろうか？

（気になるけど…ポラリスのお母さんの物だから、むやみに触れるのはまずいよね。）

そう考えた僕は、おそらく前に小箱があっただろう位置に戻す。次は写真だ。

（この写真…ポラリスにそっくりなロコンと、どっかで見た事あるようなヒトカゲが映ってる…。二匹とも、仲良しなんだろうな。）

ロコンとヒトカゲのツーショット写真。二匹は寄り添っており、おそらくそうだった仲なんだろう。

（そういえば…この写真と同じような人をどっかで見た事あるな。どこだっけ…。）

記憶の糸を必死に手繰り寄せていると、星見えの丘で起きたようなあの現象が起こった。

——フラッシュバック。

一瞬のうちに、幾つかの景色が見えては消えて。その映像の中には、写真に写っていたあの二人の姿も見えた。

（うつ…。一体何なんだこれ…。）

めまぐるしく変わる映像に、それはもう滅茶苦茶に酔ってしまった僕。少しだけ、ベッドに横になる事にした。

・
・
・

「うぎゃあああああー！」

とてつもない音量で響き渡った声。僕が寝ている部屋のドアを叩く音で、思いつきりベッドから飛び起きた僕。窓の外は真っ黒い闇に染まっていた。どうやら寝過ごしてしまったらしい。大きな欠伸を一つして、いまだに激しいノックが響くドアの方へと歩みを進めた。

「…どしたの、ルメリク？」

「ぼ、ぼぼ僕の部屋にお化けが！」

鍵を開けた途端に、僕の部屋に転がり込んできたルメリク。酷く慌

てていたので、顔面にグーパンチ。…ふう、やっと静かになった。
いや訂正、どちらかと言うと気絶した。

（にしても…お化けなんて居る訳がな…あ、ゴーストタイプが居た。
…一応、見に行ってみるか。）

僕が使っている部屋を出て、隣にあった開けっ放しのドアから部屋
の中に入る。部屋の中には何も……。いた。白いシーツを被ってい
る、超が付くほど古典的なお化け。僕の視線に気付いたらしく、と
つても気さくに声を掛けてきた。

「オウ！アナタはハジメデース。コンニチワ。」

「お、おう。コンニチワ。」

ここまで気さくなお化けって見たことがない。貴重な光景かも。

「アナタハ、サッキオドロイテ出テ行ツタ奴の仲間デースカ？」

「あ、ああ。まあそんな所かな。」

背後からどたたと、階段を昇って来る騒々しい音が響いた。後ろ
を振り返ってみると、ポラリスが居た。どうやら、さっきの悲鳴が
聞こえた時に飛び起きたらしい。

「オーウ！アナタもお仲間デスカ？」

「レグルス君、何これ？…えっと、とりあえず催眠術。」

「ハアウ…。最近ノ若者ハ世知辛いデース……。」

どさりと地面にひれ伏すお化けみたいな何か。さすがポラリス、容赦ない！

「レグルス君。このシーツ取ってみて。」

「…別に良いけど。」

お化けが被っている真っ白いシーツを引っぱがしてみると、その下に、どこかで見たことがあるようなピカチュウが寝息を立てていた。…おい何やってんだフェイン。

「痛ててて……。あれ、二人ともどうしたの？」

左の方から声がしたので振り返ってみると、体中を痛そうにしたルメリクがいた。完全に眠らせるには、少し威力が足りなかったようだ。

「ん。ああ、さっきのお化けの正体が分かったんだ。これ。」

僕がフェインの方を指差す。するとルメリクが安堵の表情を浮かべ、その二秒後ぐらいに鬼のような形相に変わった。

「どいて。二人とも。」

とても逆らえそうな雰囲気では無かったので、正直にどいてあげる僕ら。

ルメリクがフェインの首根っこを掴み、思いっきり壁に叩きつける。ルメリク曰く、これはモーニングコールらしい。…どの辺りがそう

なのか、僕には全く分らないんだけど。

「…お、おお。ずいぶん荒っぽいモーニングコールですね。先輩…。」

「いやー。こうしないと目が覚めないと思ってさあ。」

につこりと笑うルメリク。…ひょっとして、ルメリクってお化けが苦手なんだろうか？

「いやいやー。もう目を覚ましたんで大丈夫ですよ。」

「そっか残念。あごめん手が滑った!」

そう言つて、フェインの体を床に叩きつけるルメリク。おお怖い。

「痛いっすよー。ボクじゃなかったら確実に気絶してましたね!。」

「じゃあもう一回やる?」

「お断りっす。今回はこれを持ってきたんですから。」

そう言つて、鞆の中から紙で出来た細長い棒のような物を取り出す。

「じゃじゃーん。線香花火ー!」

「何それ?」

「火い付けてみれば分かりますって。一本ずつどーぞ。」

僕らの手に一本ずつ、「せんこーはなび」とやらを握らせる。僕ら全員にそれを手渡したフェインは、窓を開けてこう言った。

「家の中で着火すると確実に火事になりますんで、外でやった方がいいですよ。ではでは！」

窓から飛び降り（正確には転落）、僕らの前から姿を消してしまつたフェイン。…何なんだあいつ。

「あーあ。あいつの所為ですっかり目が覚めちゃつた。どうするよレグルス、あいつが言つた線香花火つて奴に火でも付けてみる？」

冗談交じりに出た意見に賛同するように、ポラリスも口を開いた。

「…私は、ちょっと見てみたいかも。火を付けたらどうなるんだろうね。」

「…じゃあ、付けてみる？今の時間帯だつたら怒られずに済みそうだし。」

そう言つて時計を見るルメリク。現在時刻は午後十二時半、普通のポケモンならば間違いなく夢の中だろう。そう考えた僕らは、馬鹿鼠^{イン}から貰つた線香花火を握り締め、静けさが支配している夜の街へ。階段を踏み外しそうになりながらも何とか立て直し、眠気交じりに玄関のドアを開けて飛び出した。

…ああ眠い。

・
・
・

「…大丈夫だね？誰も居なかったよね？」

ポラリスの家から少し離れた所にある、小さな草原に僕らは来ていた。ポラリス曰く、近所の悪ガキが良く集まっているそう。周りを偵察してきた僕は、この近所には誰も居なかった事を告げる。大人に見つかったら面倒な事になりそうだったしね。

「大丈夫、近くに誰も居なかったよ。」

「おっけ。じゃあ…火、お願い。」

どうやら、僕の尻尾の炎を使うらしい。…尻尾使いの荒い奴らめ。

線香花火に火をつけた僕ら。そこで見たものは、とてもとても、言葉では言いあらわせられない物だった。

第十八探検 h o l i d a y ナガレボシの休日
完

第十八探検 holiday ナガレボシの休日 (後書き)

七千字突破フラグに到達しそうだったので話を切ります。ただの日常階なのに申し訳ない…。

第十九探検 dream

～夢語り空回り～

レグルス side

火を付けたその先、パチパチと煌めく小さな火花。それは今にも消えてしまいそうで、どこか儚くて、感想を述べようとしていた僕らの言葉をすべて飲み込まれてしまった。言葉に出来ない風景、そう言われれば納得できるかもしれない。

「凄い…。」

本当に、ただ一言だけ。その一言だけが、僕らの今の感情。それ以外に何も無かった。静寂と沈黙が混じりあつた空間で、僕ら三匹はじつと静かに、火花が生涯を終える時を見守っていた。

「あ…、終わった。」

火花の残骸がぽとりと地面に落ち、小さかった光は完全に消えてしまった。それを皮切りに、僕ら三匹の緊張の糸も切れた。今の感想を口々に語り合い、その感想も尽きてしまった所でルメリクが口を開く。

「前々からさ、聞きたいと思っていた事があつたんだ。良い？」

暗闇に隠れ、彼の表情は分からなかった。いつもより若干遠慮がちなルメリクの声色に疑問符を抱きながら、僕とポラリスはこう答えた。

「良いけど。何が聞きたい？」

「私も別に…。」

その返答にほっとしたようで、いつもの声色に変わった。小さく深呼吸をして、ルメリクはこう言った。

——「自分の、自分自身が抱いている夢ってある？」

予期せぬ質問に、目を丸くする僕たち。夢って…何で？

「…なんとなく。そう、なんとなくだよ。」

明らかに何かをごまかしているルメリク。彼が嘘を付く時は決まって「なんとなく」を使う。いつもなら問いただす所だが、彼に纏わり付いた雰囲気がそうさせなかった。

「夢…ねえ。ごめん、僕はまだ分かんないや。」

率直な所、僕には夢が無い。もっとも、記憶を失った僕に夢なんておかしな話だが。

「私…夢あるよ。」

そう言っつて、静かに微笑むポラリス。僕ら二匹はびっくりして顔を見合わせた。

「…なんで、ちょっと驚いてるの？」

いやほら、急に話すもんだからつい…ね。

「…ゴメンゴメン。夢、あるのなら教えてくれない？」

僕の代わりに小さく笑いながら、ルメリクが話す。…そういえば、こいつには夢ってあるのかな？

「…もう。私の夢、カウンセラーなの。」

かうんせらー？何それ、おいしいの？と言った表情をしている僕に、ポラリスが分かりやすく説明してくれた。

「んと、カウンセラーって言うのはね、心の病気になったポケモンを助けてあげるお仕事なの。昔っから懂れててさ…。」

「…なるほど。で、何でカウンセラーになりたいのさ？」

ルメリクの質問に少し戸惑ったポラリス。小さな声で、確かにこう言った。

「…ごめん、言いたくない。いつか言うから、きつと。」

予想外の答えに戸惑うルメリク。戸惑う顔に比例する様に、空気がだんだんと重くなっていく。このままじゃまずい。そう判断した僕は、かなり強引に話を変えようとした。

「あ、あのさ！ルメリクに夢ってあるの？」

「…え？いや、うーん。職業的な夢じゃないけれど、一つだけあるよ。」

唐突に話を振られ、少したじろいでいるルメリク。まさか自分に話

が振られるとは思っていなかったのだろうか。

「その…雲の上から、皆を見守っていたいなんて。…え、どしたの？二人とも黙っちゃって。」

「……。」

「……。くくつ。」

駄目だ…笑いが堪えきれない…。

「る、ルメリク君って意外とロマンチストなんだね。ちょっと意外かも。」

どうやら笑いを堪え切れなかった様子で、クスクスと笑うポラリス。それに乗じて、本格的に僕も笑い出す。

「あー酷い！いくら僕だからってそんな笑う事無いじゃないか！」

膨れっ面のルメリクを尻目に、僕ら二匹は笑い続けた。その声が何処までも響き渡っていくのを、心地よく感じながら…。

「その…雲の上から、皆を見守っていたいなんて。」

…この言葉から発せられる大きな覚悟に、あの時の僕はまだ気付いていなかった。

——いや、気付かない振りをしていただけかもしれないけれど。

・
・
・

次の日

僕らは、町から少し離れた森に来ていた。ルメリク曰く、ここは「碧水の森」らしい。余談だが、この辺りに生えている植物は水を大量に含んでいて、火を付けても燃えないどころか、火が付かない。正直、自然って凄いと思う。

ちなみに、ポラリスはまだ夢の中だ。家のベッドですやすや寝ている。起こそうとも思っただけで、幸せそうに睡眠を貪る彼女を見ていると、起こしてはいけなような気がしたから。

「で、僕は何でここに來たのかな？」

みずみずしい空気を堪能しながら、僕が疑問をぶつける。すると、さも当たり前のようにルメリクはこう返した。

「体ほぐし。ちょっと付き合ってください？」

「…別にいいけど。水技は禁止ね。」

そこまで話し終わり、互いに数メートル離れた所で…。

向こうから、誰かが走って來た。大きな音を立てながらこちらに向かってくる土煙は、やがて電気鼠フエインの姿に変わった。…ストーカー？
「酷いじゃないですか！そんな楽しそうな事やるんだったら、ボクも仲間に入れてください！」

また面倒なのが來た、そう心の中で呟いた僕。

「…歸れ。」

「さーさー始めましょ。先輩達二人で掛かってきてください！」

ルメリクの言葉にショックを受ける様子も無く、余裕たっぷりの表情を見せるフエイン。…こうなったフエインは手の施しようが無いと分かっている僕は、ルメリクにこう囁く。

「早めに終わらせよう。」

「ああ、分かってる。」

そう言って、フェインの方へ向かい合う。

「さー、掛かってきてください!」

フェインが言い終わる前に、僕は攻撃を始めていた。

第十九探検 d r e a m 〵夢語り空回り〵 完

第十九探検 dream

く夢語り空回りく(後書き)

ふえいんくんはもつとちーとでもいいとおもいます。まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6854v/>

ポケモン不思議のダンジョン 一筋のナガレボシ

2011年11月15日09時31分発行